

第3章 生徒の主体的な学びを促すための指導上の工夫の調査

3-1 総合学科における主体的な学びの工夫

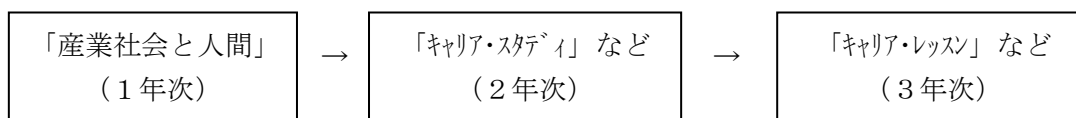
(1) キャリア教育と主体的な科目選択に基づいた学習の相互作用

総合学科創設の理念は、「①将来の職業選択を視野に入れ、自己の将来の生き方・働き方や進路についての自覚を深める教育を重視すること」及び「②生徒の個性を生かした主体的な学習（科目選択による自分の時間割によって学ぶ）を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を推進すること」である。総合学科の特色である科目選択（系列の縛りをつけるかつかないかは、ここでは問わない）を仲立ちとして、「①により学習の動機付けを行い、これによって②の主体的な学習を行なう。そのことによって、①の考察がさらに深まり、②の学習がより充実していく」という連鎖を繰り返しながら、目標に向かって階段をらせん状に駆け上っていく仕掛けが、総合学科の主体的な学びの本質である。

総合学科の特色という点、「自由に科目選択が出来る」、「自分で時間割をつくる事が出来る」、「幅広い選択科目が開設されている」というところは、一般に広く知られているところであるが、それを教育的な価値あるものに形づくっていくのが、総合学科のキャリア教育の役割である。個性を生かした生徒の主体的な科目選択（時間割作成）による学習とキャリア教育を両輪として、総合学科の教育活動が成り立っていることを押さえることが肝要である。

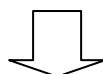
そして、キャリア教育の中核的役割を担っているのが、総合学科の原則履修科目「産業社会と人間」である。「産業社会と人間」は、中央教育審議会第14期答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」（平成3年4月19日）の中で、総合的な新学科（後の「総合学科」）設置と共に示された「第1学年で職業生活に関する基礎的知識を身に付けた後、第2学年から・・・」という文言による提言から始まっている。この提言は、高等学校教育の改革の推進に関する会議「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）－総合学科について（報告）－」（平成5年2月12日）において、科目「産業社会と人間」として明示され、平成6年度から設置が始まった総合学科で、原則として1年次で全員が履修している。なお、平成11年度以降からは高等学校学習指導要領に明確に位置付けられている。この「産業社会と人間」のカリキュラム開発は、総合学科の初発校をはじめ、全国の総合学科を設置する高校で研究と実践を積み重ね一定の成果を得ている。その詳細は次節で扱うこととして、ここでは、体系的・系統的なキャリア教育のしくみという観点から、触れておかなければならないことがある。それは、総合学科の開設が全国に広がってきた一時期、1年次は「産業社会と人間」の授業をとおして、自己のあり方・生き方や進路等について、しっかり考えることができているが、2年次になって「産業社会と人間」を引き継ぐ学習の時間が欠落していることから、せっかく芽生えた進路意識等が希薄になり、3年次の進路実現に上手く接続されていない状況が指摘されるようになってきたことである。このことは、平成11年3月文部省告示高等学校学習指導要領（以下「現高等学校学習指導要領」という。）に基づいて、平成15年度より施行された教育課程では、「総合的な学習の時間」が必置とされ、この時間を活用して、2・3年次における継続したキ

キャリア教育が展開されるようになり改善が図られているが、キャリア教育を推進する上で、系統性・継続性の視点を持って行うことが重要であることを明示している。「総合的な学習の時間」は各学校において名称を付すことになっているため、様々な名称が用いられているが、総合学科の大勢が、概略として下図に示すとおり、「産業社会と人間」を起点とした体系的・系統的なキャリア教育を展開している。



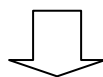
これを、今回の「総合学科の在り方に関する調査研究（以下「調査研究」という。）」結果に基づき、目標、ねらい及び学習内容を視点にして、一つの事例を示すと次のようにまとめることができる。

| 1年次「産業社会と人間」 | |
|--------------|--|
| 目標 | ① 自己理解と肯定的自己受容を図る。 ② 様々な職業・学問を理解し、選択基準としての職業観・勤労観の確立を図る。 ③ 将来設計の立案とライフプランを描く。 ④ 適切な履修計画を作成する。 |
| ねらい | ① 他者との関係において自己の能力・適性、興味・関心等を追求し、自分の良さや優れた個性についての考察を深める学習をとおして、肯定的な自己受容を促がし、意欲的に高校生活を送ろうとする態度を醸成する。 ② 将来の職業人として要求される能力・資質（人間関係形成能力、意思決定能力、将来設計能力、情報活用能力など）を理解し、産業社会の発展に貢献できる基本的態度を醸成する。 ③ 産業社会、職業及び職業生活・社会生活の現状・課題とこれを支える学び（学問）の重要性を認識する学習をとおして、生涯にわたって学習を積み重ねようとする自己教育力の育成を図る。 |
| 学習項目 | ①自己理解・自己受容 ②社会の理解 ③職場体験・職業理解 ④学び・学問・上級学校理解 ⑤履修計画 ⑥ライフプラン ⑦学習発表会 |



| 2年次「キャリア・スタディ」（総合的な学習の時間） | |
|---------------------------|--|
| 目標 | ① 自・他の理解を深め、自・他の尊厳を認識するとともに、肯定的自己受容とを確立する。 ② 1年次に描いた将来設計・進路設計について、幅広い視点をもって考えを深め、目標の妥当性や現実とのギャップを確認し、課題を明らかにしながら、目標達成のための具体的筋道・方策をデザインするとともに、具体的進路目標の深化を図る。 |

| | |
|------|---|
| | <p>③ 3年次の履修計画について、再確認を行い、適切な履修計画を作成する。</p> <p>④ 3年次の「課題研究」の準備を行う。(調査・方法・研究の仕方、社会的・科学的課題の追求、テーマ設定)</p> |
| ねらい | <p>① 自・他の理解を深め、肯定的な自己認識と自他の尊厳を確立することにより、学校生活における自己の役割・責任を自覚し、他者と協調して充実した高校生活を築くことをとおして、職業生活や社会生活で必要とされる資質・能力の伸長を図る。</p> <p>② 進路目標と現実・課題の理解、目標達成の方策の検討及び履修計画の吟味をとおして、学習の動機付けを強め、意欲的な学校生活を送ろうとする態度を醸成する。</p> <p>③ 一人ひとりが進路に関する事項、2年次での学習領域に関する事項及び興味・関心のある事項について、研究テーマを設定することにより、社会や学問についての課題を理解し、進んで課題解決を図ろうとする基礎的・基本的な能力・態度を育成する。</p> |
| 学習項目 | <p>①自己理解・自己受容の深化 ②社会・職業理解、インターンシップ、社会的諸課題の理解 ③学問・上級学校理解、学校訪問・オープンキャンパス、科学的諸課題の理解 ④履修計画 ⑤調査研究 ⑥学習発表会</p> |



| | |
|---------------------------|---|
| 3年次「キャリア・レッスン」(総合的な学習の時間) | |
| 目標 | <p>① 自己理解と肯定的自己受容を踏まえて、ライフプランと具体的進路目標を再確認(吟味)し、進路先を決定する。</p> <p>② ライフプランと具体的進路目標の実現のため、描いた方策に沿って、一人ひとりの進路実現を図る。</p> |
| ねらい | <p>① 1年次から積み重ねてきた自己理解と肯定的自己受容を踏まえて、自己のライフプランを振り返り、具体的進路目標を確定することをとおして、進路実現を図ろうとする意欲と態度を醸成する。</p> <p>② 進路目標を達成する過程をとおして、将来の社会における自己の役割を意識させ、自らの将来を切り開くとともに、社会の発展に寄与しようとする能力・態度を醸成する。</p> |
| 学習内容 | <p>職業コース(就職希望)、進学コース1(大学・短大・医療系専門学校)及び進学コース2(専門学校希望)に分かれて、進路実現の実践力を身につける。</p> |
| 3年次「課題研究」(総合的な学習の時間) | |
| 目標 | <p>① 一人ひとりが進路に関する事項、2年次での学習領域に関する事項及び興味・関心のある事項について、疑問に感じていることやさらに深めたい課題を研究テーマにして、テーマ追求学習(課題解決学習)を行い、所定の書式</p> |

| | |
|-------------|--|
| | <p>にしたがって報告書等を作成する</p> <p>② テーマ追求学習をとおして、情報活用能力、思考力・分析力、意思決定能力、人間関係形成力等を身につける。</p> |
| ね ら い | <p>① 一人ひとりが主体的に課題を設定し、追求の手立てを立案し、実行し、評価・考察を行う学習をとおして、課題解決能力を育成するとともに継続して学習・調査・研究に志す態度（知識基盤社会・生涯学習社会における自己教育力の獲得）を醸成する。</p> <p>② テーマ追求学習をとおして、自己のあり方・生き方や社会の課題を認識し、自己の役割を意識した積極的な社会参画と社会における諸課題の改善を図ろうとする能力・態度を醸成する。</p> <p>③ 教科学習で習得した知識・技能を関連付け、学習の深化・総合化を図るとともに、卒業後の職場や進学先での働きや学びの動機付けを図る。</p> |
| 学習 項目 | <p>①一人ひとりがテーマを設定した研究活動（調査、聞き取り、実験・観察、創作・製作・実習、体験活動・現場実習） ②報告書の作成 ③学習発表会</p> |

(2) 主体的な学びを喚起するはたらきかけ

総合学科における主体的な学びの源泉は、科目選択（自分の時間割づくり）とそれに基づく学習及び「産業社会と人間」を起点とするキャリア教育の両輪であることを前項で述べたところであるが、生徒が主体的に学びを行っていくには、生徒個人の内面にはたらきかけ、学びに対するモチベーションを高めることが必要である。主体的・意欲的な学習を喚起するには、課題意識を持たせ自己の目標を明らかにさせることが特に有効である。このため、多くの総合学科が「産業社会と人間」などのキャリア教育において、次の表3-1-1に示す学習内容を取り入れ、これらの学習活動が、生徒の学習や進路・将来に対する意識の向上につながっていることが、この調査研究で明らかになっている。

表3-1-1 主体的な学びを喚起するはたらきかけ

| 項目 | 学習内容（単元・学習活動等） | この学習を行なう意義 |
|-----------|---|---|
| 自己理解 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 他者と自己の出会い・仲間づくり ○ 学校生活（集団）と自己の役割 ○ 自分探し ○ 自分の世界を広げる ○ 自分史・私の履歴書作成 ○ 自己アピール・スピーチ ○ 構成的グループエンカウンター（スゴロクトーキング、自他の再発見、グループ観察、他者紹介など） ○ 適性検査（自己理解検査、職業適性検査、職業興味検査、進路適性検査など） | <p>行先が決まっても、現在地が不明であれば、目的地へ至るルートや手段を選ぶことができず、目的地へ到達することはできない。</p> <p>又、現在の到達度や状況を把握せずに設定した目標は適切性を欠くものである。人生の歩みも、これと同じで、自己を理解することは、キャリア教育の基本である。</p> |
| 職業理解 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 働くこと、働くことの意味 ○ 職業と自己のかかわり ○ 職業調べ（種類、内容、役割、やりがい、就業構造・産業構造など） ○ 職場体験学習・インターンシップ ○ ジョブシャドウ ○ 職業人インタビュー ○ 職業と資格取得 ○ 職業別ガイダンス・企業研究 ○ 職業人講話 ○ 卒業生体験談 | <p>人生の大半は職業生活である。進学する者もやがては就職する。人は職業生活をとおして、社会に貢献し、自己実現を果たしていくものである。職業についての様々な知見を得、自己を存分に生かす職業とは何かを考えることは、キャリアデザインを描く上で不可欠である。</p> |
| 上級学校・学問理解 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 学問調べ（分類・内容・役割・学術上の研究課題など） ○ 学び、学問、科学、科学技術と社会の関わり | <p>知識基盤社会と呼ばれる現代社会では、社会生活や職業生活において、あらゆる場面で科学・学術研究</p> |

| | | |
|--------------|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ○ 上級学校調べ（種類、教育研究内容、入試制度、卒業後の進路状況など） ○ 上級学校見学 ○ 上級学校体験授業 ○ 学校種別・分野別ガイダンス ○ 上級学校教官による模擬授業 ○ 卒業生体験談 | <p>の成果が活かされている。</p> <p>また、教育研究を担う上級学校の内容・役割を理解することは、進学希望者のみでなく就職希望者にも必要である。この学習活動は、進路決定にあたって欠かせない事項である。</p> |
| 社会認識 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 地域を学ぶ・地域から学ぶ ○ 職業と社会のかかわり ○ 社会の変遷と課題 ○ 国際化 ○ 情報化 ○ 少子高齢化 ○ 環境問題 ○ 福祉社会とは ○ 豊かさ ○ 男女共同参画社会とは ○ 資源・エネルギー ○ 平和と人権 ○ 健康、余暇、芸術 | <p>変化の著しい現代社会において、社会の現状と抱えている諸課題を認識し、学校での学びと結びつけ、諸課題を解決しようとする意識・態度を育てることは、主体的な学習活動を促し、履修計画や将来設計をデザインするにあたって重要な要素である。</p> |
| 履修計画・人生設計 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 履修・系列ガイダンス ○ 時間割づくり ○ スクールライフプラン ○ ドリカムプラン ○ キャリアデザイン ○ ライフデザイン ○ 30歳のレポート | <p>目標を持たせ、目標に向かっての道筋を描かせることは、学校生活を有意義なものにさせるとともに、主体的に進路を選択し自己の職業生活を切り拓いていくのに不可欠である。</p> |
| 追求手段 自己表現 | <ul style="list-style-type: none"> ○ スピーチ ○ ディベート ○ ロールプレイング ○ 座談会 ○ 対話 ○ パネルディスカッション ○ 調査・情報収集の方法（アンケート、インタビュー、文献調査、インターネット） ○ 依頼状と礼状 ○ 電話の応対 ○ マナーと身だしなみ ○ レポート ○ 小論文 ○ ポスターセッション ○ プレゼンテーション ○ 交流活動 ○ ボランティア ○ 探求活動 ○ 発表会 | <p>自己を知り・発見し、職業・社会、学問・上級学校を理解し、将来設計を描くには、受身的な学習活動では大きな成果を期待することはできない。総合学科では、生徒主体で能動的・体験的・自主的な学習活動を取り入れている。このことは、生涯学習社会における自己教育力の育成に重要な役割を果たしている。</p> |

注1) 具体的な指導事例・指導案・展開については、各学校で独自のものを作り上げたり、テキストを作成したりして取り組まれている。また、本研究会の代表である服部次郎氏編著の「産業社会と人間 新訂版 よりよき高校生のために」(学事出版)は、各学校にとって参考となり、

生徒が即使用できる書籍・テキストとして知られている。なお、教師用手引書として同氏、同出版社より「産業社会と人間 実践の手引き」が刊行されているので、あわせて参考にされるとよい。

注2) 表1に示した内容は、総合学科で主体的な学びへ導入するために取り入れられている内容であるが、その中で、特に奇抜なアイデアをもって工夫した取り組みを行っている事例を「3-3 「特色ある産業社会と人間」指導事例の紹介」で示した。

(3) 職業や社会とのかかわりを重視した自己の生き方・在り方学習の推進

多様化する生徒の進路、興味・関心に対応し、生徒が主体的に能力・適性や個性を伸ばさせる学びを展開する場として期待され登場したのが総合学科である。しかしながら、単なるひとよがりの、あるいは、社会や職業とのかかわりを欠いた科目選択（時間割づくり）やキャリア教育（将来設計、自己のあり方・生き方学習）では、将来を見通したとき、有為な職業人・社会人として、必要な能力・適性や個性を伸ばし、それを発揮する事はできない。そこで、総合学科では、社会や職業とのかかわりの中での自己の生き方・在り方や社会における役割を意識したキャリア教育を推進するように努めている。

このために、学校外の教育資源を活用し、地域社会と連携したキャリア教育や教科・科目の学習活動が積極的に展開されている。

(4) 主体的な学びの典型である探求活動（課題研究）の推進

総合学科では、入口の「産業社会と人間」、出口の「課題研究」（名称は各学校で様々であるが）といわれ、この二つは本学科の特色ある学習活動の屋台骨をなしている。

総合学科における「総合的な学習の時間」の学習内容は、現高等学校学習指導要領及び平成21年3月文部科学省告示高等学校学習指導要領（以下「新高等学校学習指導要領」という。）に規定されている。すなわち、「生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動」を原則として行うように示されている。

これに基づいて、総合学科では、教科・科目の授業のように、教師が主導して授業を進めるのではなく、生徒一人ひとりがテーマを設定し、そのテーマを追求するために、毎時の学習計画をたてて、調査・実験・観察・製作・調べ学習、まとめ、報告書作成、発表会・報告会等の学習を展開している。

この探求活動は、自分の時間割で学んだ学習の集大成を行うとともに、次のステップ（職場・上級学校）へ進むための動機付けや目的を明らかにする大切な学習活動でもある。総合学科の卒業生アンケートでは、「3年間で一番力がはかった授業だった。」「大学での研究に対する準備期間として役立った。」「自分が本当にやっていきたいことと向き合えた。」「達成感と充実感が味わえた。」「研究することの大切さや学び方がわかった。」「受験の強みになったし、いろいろな力が身についた。進路や受験に役立った。」「予想以上に進学先で研究対象になるような課題を見つけれられた。」「大学での研究に対する準備期間として役立った。」などの回答に代表されるように、学びの成就感や進路目的を明らかにする成果があがっている。そのねらいは次の点にある。

(ア) 課題解決の能力と態度を養う

今後の社会が求めている人材は、課題を認識・整理し、解決策を企て、果敢に実践し、その結果を踏まえて、目標を達成・深化させていく能力・態度をもった人材である。世の中には、模範的な正解がある課題とそうでない課題が混在しているが、教科・科目の問題（試験）では、今までの学術的・科学的探究の成果により模範解答が存在している。これらの知識を獲得することは人間形成において必要不可欠であることは言うに及ばない。

しかしながら、学術的・科学的に究明されていない未知の領域は限りなく存在するとともに、実社会の課題には決まった正解がないのも事実である。

現在、さまざまな課題に直面している現状において、これからの社会を担う若者に、課題解決の能力と技能を身につけ、主体的に課題解決に向き合う態度を養成するにあたって、この研究活動は成果を挙げている。

(イ) 学習の深化・総合化を行う

小学校から高校にいたるまで、国語・社会・数学・外国語・理科・体育・保健・芸術・専門科目（高校）と教科別の学習に多くの時間を費やしてきた。これらの学習を集大成して生きた知識・学力へと進化させる必要性が指摘されているところである。

個々の知識・技能の習得は、もちろんそのみでも有用であるが、社会や自然の複雑な課題や難しい課題を解決するためには、身についたそれぞれの学力・技能を相乗化して駆使する能力を身につけることが必要である。探求活動は、これらの能力を獲得するのに役立っている。

(ウ) コミュニケーション能力を養う

現代社会では、自らの考え・意志や仕事の成果などを的確に相手に伝えるとともに、相手の気持ちを理解し、積極的にコミュニケーションを図りながら生活したり仕事をしたりする能力が求められている。探求活動では、データを収集して有用な情報に整えたり、考察を加えたり、結果を文章・図表で表現したり、聴衆の面前で発表・報告したりする学習活動をとおして、コミュニケーション能力を培っている。

[参考文献・引用文献]

- 中央教育審議会第14期答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」（平成3年4月19日）
- 高等学校教育の改革の推進に関する会議「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）－総合学科について（報告）－」（平成5年2月12日）
- 「総合学科について（通知）」文部省初等中等教育局長（平成5年3月22日）
- 平成11年3月文部省告示高等学校学習指導要領
- 平成21年3月文部科学省告示高等学校学習指導要領
- 「産業社会と人間」指導資料 文部省 ぎょうせい（平成7年3月30日再版発行）
- 「産業社会と人間」新訂版 よりよき高校生活のために 服部次郎編著 学事出版（2011年3月10日 第5印発行）
- 「産業社会と人間 実践の手引き」筑波大学教授 服部次郎編著 学事出版（2004年7月28日 初版発行）

（田畑 邦仁）

3-2 「産業社会と人間」の調査結果の分析と考察

本調査では、総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」が各校においてどのような年間計画にもとづき実施されているかについて、自由記述によって回答をもとめた。各校では「産業社会と人間」とおしてキャリア教育を推進するさまざまな取り組みをおこなっているが、特に、(1) 代表的な学習活動、(2) 独自のテキスト(ノート)作成、(3) 中学校および高校2・3年次の学習の接続または連携、の3点について焦点化した質問をおこなった。(1)は、「産業社会と人間」において必須分野といえる「①自己理解・②社会理解・③職業理解・④履修計画」の4分野において各校の代表的な学習活動を自由に記述してもらい、キーワードによって実践校数をカウントし、全体的な傾向について分析を試みた。(2)は、提供いただいた3校のノート(テキスト)の内容からその特徴を分析した。(3)は「総合的な学習の時間」との関係性や高大連携などの取り組みについても傾向が伺える質問を意図した。(回収数は206校)。以下、質問項目に沿って全体の傾向を確認する。

(1) 「産業社会と人間」における代表的な学習活動

①自己理解

総合学科の高校へ入学して最初に学ぶ科目のひとつが「産業社会と人間」である。高校での学習活動をイメージし、高校生活の目標を明確化するうえでも、様々な角度から自己理解を深めることは、進路意識の明確化や履修計画の充実にも大きく影響する。そのため各校では様々な取り組みをおこなっている。

特に目立ったのは「適性検査の実施(59校)」である。職業レディネステストや進路適性検査、文理適性検査などの回答が見られた。なかには、「R-CAP (RECRUIT Career Assessment Program) (11校)」や「自己発見リサーチ(ベネッセ) (1校)」のように情報サービス業者による検査名を挙げた学校もある。入学後早期にこれらの検査を実施することでホームルーム担任は生徒像の把握をおこない、三者面談などによって保護者との情報共有を進め、生徒の進路意識の深化を促すねらいがあると思われる。

また、さまざまな手法を用いた「クラス開き(学年開き)」の実践も伺える。たとえば、交流分析による性格診断のエゴグラム(6校)や学級集団作りのカウンセリング方法であるエンカウンター(6校)、思考・問題整理(解決)ツールのマインドマップ(4校)などの手法を利用して、クラス内の人間関係づくりを促進することで自己理解を深めるねらいがあると思われる。さらに、「カタリバ」(NPO法人によるキャリア学習)や「プロジェクトアドベンチャー」(信頼関係づくりのアクティビティ)など、外部機関との連携によってプログラムを構築・実践している学校や、「宿泊研修(8校)」によって人間関係構築や総合学科システム理解を集中授業としておこなう学校もみられた。

このような方面に配慮する背景には、生徒のコミュニケーション(人間関係構築)能力の低下が懸念される。ソーシャルスキルトレーニング(2校)をはじめ何らかの「コミュニケーションスキル」の演習等を導入している学校は14校にのぼり、高校生活を送るうえで様々な場面で想定されるコミュニケーションスキルの育成に時間をかける必要が見受けられる。

以上さまざまな学習活動を通して自己理解を深めた総合学科の生徒たちは、「産業社会と人間」の最終目標である「履修計画の作成」へいたるわけであるが、そのプロセスとして重視されるのが「自分史（43校）」や「ライフプラン（70校）」の作成・発表などの学習活動である。

「自分史」は、高校入学までの生活をふりかえり、自分なりに分析する活動をとおして高校生活の目標を明確化したり、それを発表することで他者からの理解・共感を促す働きがある。「さまざまな生徒が同じクラスで学び、尊重しあう環境づくり」を醸成するうえで重要な活動ともいえる。また、ライフプランについては各校によって「キャリアデザイン・キャリアプラン」などの名称もあり、その内容も異なる部分があると考えられるが、何らかの形で自らの科目選択（履修計画）を総括し、さらには他者に向けて発信（発表）する活動を通して、進路意識の醸成を促していることが伺える。

②社会理解

文部科学省が平成21年度に実施した「総合学科、学校設定科目『産業社会と人間』に関する調査」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/seido/1311830.htm）では、「産業社会と人間」の目標を「自己の将来の生き方・働き方や進路について考察する」と回答した高校が約7割にのぼり、科目の学習内容もそれにもとづいて展開されることになるが、適切な職業観育成のためには、めまぐるしく変化する現代社会が抱える諸問題の理解も重要である。たとえば学事出版のテキスト『産業社会と人間～よりよき高校生活のために～』では、第3章「社会の中で生きること」において、「環境・情報・国際理解・福祉・豊かさ・男女共同参画・労働環境・これからの社会」などの分野を掲載している。本項目では、各校において現代の日本社会（あるいは世界）の諸問題や雇用情勢についてどのような学習活動を展開しているか記述してもらった。「社会理解」という大きなくくりで回答してもらったため、回答も多岐にわたったが、「国際（11校）」や「福祉（14校）」、などとともに「地域（9校）」をフィールド（テーマ）にした学習活動を回答した学校もみられた。また、雇用情勢の理解を深めるための「フリーターに関する講話・理解（5校）」をおこなう活動や、後述するインターンシップの事前学習として「マナー」に関する演習や講話をおこなう（12校）という回答もみられた。その一方で、就職希望者よりも進学希望者の多い高校では「上級学校（26校）への訪問・見学」を回答する学校もあり、多様な進路希望の生徒が在籍する総合学科の全体像を伺わせる内容となった。

③職業理解

職業理解として実施される代表的な学習活動として、「インターンシップ（18校）」や「就業体験（5校）」、「企業見学（23校）」などが目立った。しかし、インターンシップについては2年次で実施する学校も多く、1年次ではまず「見学（56校）」や「インタビュー（47校）」という活動をとおして職業理解を深めたうえで次年度にそなえる、という展開が多くみられた。インタビューや講話・講演などの対象として「職業人」が目立つが「卒業生（21校）」を活用する高校もみられた。

④履修計画

「産業社会と人間」の一番のねらいは生徒の主体的な科目選択支援であり、学習活動のメインに位置づけている学校が多い。前述「総合学科、学校設定科目『産業社会と人間』に関する調査」では、調査対象校の9割以上が「生徒が将来の職業選択を視野に入れ、自己の将来の生き方・働き方や進路について自覚を深めることができている」と回答しているが、その一方で、6割近くの学校が「生徒が目的意識や将来の進路への自覚を持っていないため、主体的な科目選択を行わせることが難しい（安易な科目選択を行う傾向にある）」と回答している。多くの総合学科高校において、生徒へ主体的な科目選択をおこなわせることへの課題意識を持っていることが伺える。

本調査においても各校がさまざまな学習活動を展開していることが伺える。たとえばカリキュラムや科目選択方法、シラバスの説明などについては、多くの学校において「ガイダンス（70校）」や「説明会（53校）」という名称で実施しているが、そのなかでも、科目選択仮登録などを実施して複数回の説明・科目選択を実施したり、保護者対象の説明会を実施するなど、きめ細やかな対応をおこなう学校がみられた。また、「模擬授業・授業体験（30校）」や「授業見学（12校）」のように、次年度以降受講するであろう授業を実際に受けたり見学することで、スムーズな科目選択の支援をおこなっている学校もある。さらに、「面談・面接（20校）」「相談会・懇談会・カウンセリング（10校）」などのように、生徒がホームルーム担任や希望する専門教科（分野）の教員と個別の相談などをおこなう時間を設ける学校もみられた。卒業生や上級学校の講師などを招いて意識付けをおこなう学校もあり、さまざまな機会を設けて生徒の主体的な科目選択を支援している。

こうした学習活動の背景には、「生徒に主体的な科目選択をさせる難しさ」を総合学科の教員が課題意識として強く感じていることが考えられる。生徒の主体性をどう育てるか、あるいは生徒に対して科目選択も含めた「失敗させる」勇気を持ちうることも、支援の在り方として考える必要があると思われる。いずれにせよ、学校や生徒の実情をふまえた効果的な科目選択支援プログラムの開発には今後も時間と労力が必要となるだろう。

（2）「産業社会と人間」に関する独自のテキスト（ノート）作成

「産業社会と人間」はいわゆる検定教科書がないため、各校の工夫によって独自のテキストを開発している場合も多い。今回の調査では、約4割の学校で独自のテキスト（ノート）を作成している回答があった。そのうち3校から独自開発のノートを提供いただいた。その概要は、ワークシート中心のノート、資料も挿入されたテキストと兼用のノートというスタイルである。「産業社会と人間」の授業者となる教員は、特に初任・若手教員については、本来の教科と異なる領域を教えることへの抵抗感を持つ者も多い。抵抗感を軽減する意味で、あるいは校内における継続的な指導体制の構築という意味でも、各校独自のテキスト（ノート）作成の意義は非常に大きい。テキスト（ノート）作成を通して「産業社会と人間」における学習のねらいを教員間で共有できる点も魅力である。以下に各校のテキスト（ノート）の項目を列挙し、その特徴を分析する。

【A校の場合】

- | | | |
|-------------|------------|---------|
| ①目次・実施予定 | ②オリエンテーション | ③自己紹介 |
| ④講演会・見学会・実習 | ⑤評価について | ⑥系列について |

- ⑦科目選択について ⑧進路について ⑨ライフプラン
- ⑩プリント貼り付け用スペース ⑪総合評価 (計76ページ)

…評価について、自己評価・相互評価・評価指標など丁寧な説明や具体的な評価の観点が示されている。

【B校の場合】（目次が無いいため項目名は筆者による）

- ①シラバス ②科目のガイダンス ③先輩からのメッセージ
- ④卒業認定単位（履修と習得） ⑤なぜ高校で学ぶのか ⑥自己分析（エゴグラム）
- ⑦自分史（過去と未来の自分） ⑧「働くこと」を考える（平成若者仕事図鑑・国民生活基礎調査・姜尚中『悩む力』より・求人票・労働基準法・NHKデータマップより）
- ⑨進路について考える（卒業生の進路状況・先輩と語ろう・担任と個人面談・職業人の話を聴こう・来年の時間割・科目登録説明会・上級学校について調べる・現場見学） (計63ページ)

…豊富な資料を掲載し、「産業社会と人間」の学習活動すべてを記録できる構成。

【C校の場合】（目次が無いいため項目名は筆者による）

- ①オリエンテーション ②進路講話 ③進路適性検査結果をもとに担任と面接
- ④職業調べ ⑤履歴書を見る ⑥各系列の体験授業
- ⑥科目選択説明会1 ⑦時間割作成法 ⑦学校別・職業別説明会
- ⑧プレゼンテーションの方法 ⑨保育実習 ⑩科目選択説明会2
- ⑪小論文に挑戦 ⑫プロジェクト・ベース学習を始めよう
- ⑬長期休業中の学習計画表添付スペース ⑭学習評価シート（1年間のふりかえり）

…学習スキル獲得のためのページが挿入され、1ヶ月ごとに「学習のテーマ」が掲載されているため、年間を通じた「学びの記録」が意識できる構成となっている。

以上のように、各校によって取り組みの内容は多様であるが、テキスト（ノート）を生徒のキャリア発達の足跡を長期的展望で評価するポートフォリオ(学習成果物のファイル)として機能させるために、ある程度フリーなスペース（自由に書き込める・プリント類を貼り付ける等）を確保しているタイプが多くみられた。また、成績を出すための評価テストを実施しにくい科目の特徴から、成績（評価）を出すための評価指標（規準）を示したり、年間スケジュールや学習活動の全体像を示して生徒の学習意欲の喚起を促す構成になっていることが伺える。各校の取り組みの工夫については、今後さらに情報共有が進んでいくことが望ましい。

(3) 継続的なキャリア教育展開に向けて（接続・連携の課題）

「産業社会と人間」の授業計画の際、中学校でのキャリア教育の学習内容をふまえて計画を立てているか、という質問に対し、「はい」と回答した高校は24校（11.7%）だった。中学校での学習内容に対する具体的配慮としては、「重複を避ける（4校）」、「中学校での実施状況の調査（3校）」、「発達段階に応じた（発展的な）目的・ねらいを示す（6校）」、「進路希望に沿った・就職を意識した内容（2校）」、「中学では2・3年で職

場体験を行ってきているため、高校での実施は1年次から2年次に変更した(1校)」、などが挙げられた。一方、「インターンシップや職場体験は中学校までにはほぼ全員が経験済みのため高校では実施しない(2校)」という回答もみられた。

職場体験やインターンシップ等の実習体験は、生徒の勤労観や職業観、進路意識の深化を促進する効果の高い重要な活動ではあるが、一方で事前・事後指導や受け入れ先との連絡調整等、教員の負担も大きい。学習効果の高い実習をおこなうためには、中学校までの体験活動と比べて「目的やねらい」が生徒の発達段階に応じて発展・深化していることが望まれる。そのため生徒の学習歴調査は重要であり、中学校との積極的な情報交換(共有)などが今後の課題と考えられる。

また、中高連携(小学校・大学でも可)のキャリア教育を実践しているか、との質問に対し、51校(24.8%)が「はい」と回答している。そのうち30校が、上級学校訪問や出前講義など大学との連携を挙げている。なかには「提携した大学・専門学校の講義を受講、単位認定」をおこなっている高校もあり、生徒の上級学校進学にむけたさまざまな場の提供がおこなわれている。一方、中学校や小学校との連携については、「小中学校への(高校生・職員による)出前授業(農業・調理指導・理科実験など)」、「小学校との交流会」、「研究発表会への中学生招待」、「中学生一日体験入学」、「部活動交流」などがおこなわれている。また、宮城県・岐阜県では学校種間連携で小中高の複数校が合同のプロジェクトを実施するなど積極的な連携が展開されている事例報告もあった。

(4) 「産業社会と人間」調査のまとめ

「産業社会と人間」に関する調査をとおして、(1)各校における代表的な学習活動の傾向、(2)独自のテキスト(ノート)の作成、(3)継続的なキャリア教育展開に向けた接続・連携の課題、について分析と考察をおこなってきた。(1)と(2)においては、各校のさまざまな取り組みの工夫がみられ、総合学科がスタートして20年近くの成果が集約された結果となった。今後の課題は(3)継続的なキャリア教育展開に向けた接続や連携であるだろう。外部機関や異種学校間との連携については、学校間の事情を含めた連絡調整などの労力も大きい。積極的な情報発信と連携によるワークシェアリングの工夫によって解消される部分もあるのではないだろうか。たとえば前述「総合学科、学校設定科目『産業社会と人間』に関する調査」では、「中学校及びその保護者の総合学科に対する理解や認知度が低い(61.8%)」「中学校の教職員の総合学科に対する理解が不十分である(57.5%)」といった回答がみられた。積極的な連携によってこれらの課題は克服できる可能性が高い。そのためにも外部への積極的な情報発信は必要と思われるが、今回の調査において、各校の「産業社会と人間」年間指導計画の公開に対して許諾を求めたが、諾の回答のあった学校は51%(105/206校)にとどまった。それぞれの学校の事情もあると思われるが、よりよい総合学科づくりに向け、各校の協力と情報共有を今後さらに促進させていくべきであろう。

(奥村 準子)

3-3 特色ある「産業社会と人間」指導事例の紹介

(1) 「30歳のレポート」の取り組み（大分県立日田三隈高等学校の実践）

① 概要

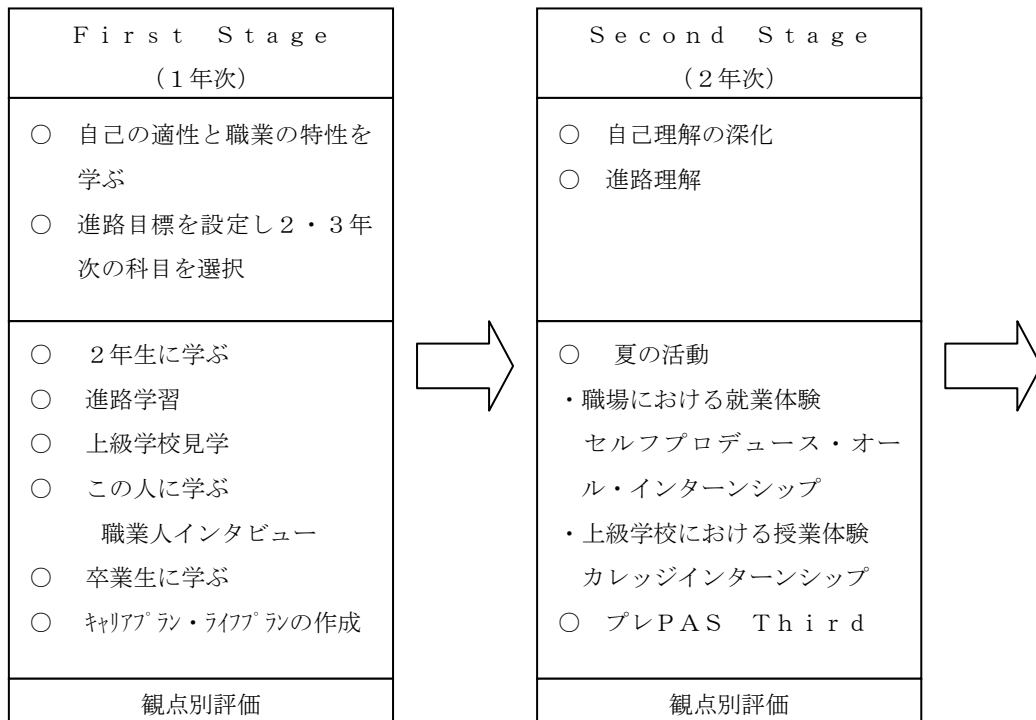
総合学科は「短期間に、結果のみを求めるのではなく、プロセスを大切にしながら、丁寧に時間をかけて自己実現を図っていく学科である」という考え方に基づいて、「30歳のレポート」を卒業生に課している。

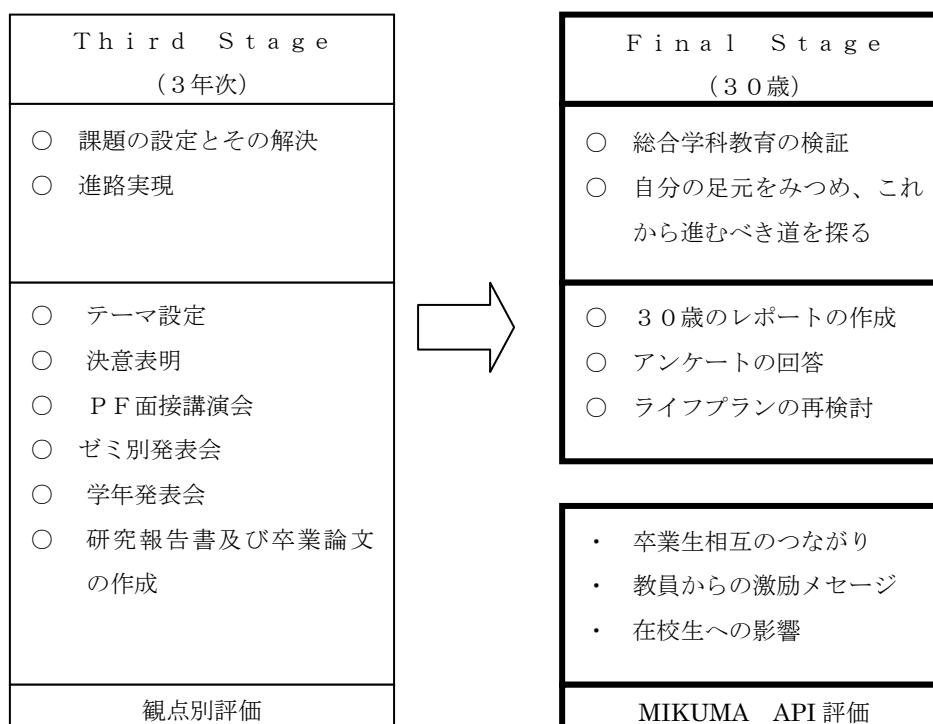
平成8年に総合学科を開設した同校は、第1期卒業生が平成22年度に30歳を迎えた。当初の計画どおり、卒業生から「30歳のレポート」及び「アンケート」を提出させ、卒業生のその後の歩みを把握して、卒業生のライフプランをサポートするとともに、同校の総合学科教育の検証に活かしている。

また、年度末には生徒の「総合学科発表会」とあわせて「30歳のレポート発表会」を実施して、在校生の将来設計や生き方・在り方学習に効果的な影響を与えている。この取り組みは、第2期生以降（平成23年度既に実施）も継続して取り組まれており、この積み重ねの成果が期待される。

② キャリア教育の全体像

日田三隈高等学校のキャリア教育は「Mikuma PAS System」としてまとめられ、高校3年間と卒業後に及ぶ継続したキャリア教育を展開している。“P”は「Plan（計画）」、「Progress（進歩）」、“A”は「Action（行動）」、「Achievement（達成）」、“S”は「Support（援助）」である。このシステムは、4つのステージで構成されており、順を踏んで学習が展開されている。その概要を次に示した。





③ 「30歳のレポート」を導入した趣旨と目的

ア 趣旨

総合学科教育は、つまるところ「人間としての在り方生き方の指導、自己実現の支援である。」と捉えており、その目標が実現されたかどうかは、高校卒業時点では判断しづらい。目標・将来設計の達成度をより深く検証するためには、卒業後、社会人としてある程度の期間をおいた時点で、改めて評価や支援が必要であると考えて、この取り組みを導入している。

イ 目的

- a 学校の教育活動が適切であったかどうかの検証を行う。
- b 卒業生へのエールを送るとともに、「産業社会と人間」や高校生活などを振り返り、これから進むべき道を見つめなおしたり、明らかにしたりする。
- c 在校生の将来設計や生き方・在り方学習を深める教材・機会とする。

④ 「30歳のレポート」を実施する組織の概要

| | |
|----------|--|
| 校内実行委員会 | 校長、教頭、事務長、総合学科主任、委員（4人）、事務室（1人） 大分県教育庁高校教育課 指導主事 |
| 校内協力者 | 教諭（3人） |
| 校外協力者 | 当該卒業生担任団で校外に居る教員等 |
| 発表会助言者 | 学識経験者等（発表会助言・指導講評） |
| 同窓会 | 正副会長（当該卒業生ネットワークづくり） |
| 当該卒業生協力者 | 当該卒業生（5人）（レポート提出呼びかけ） |

⑤ 「30歳のレポート」を実施する方法・手順（第1期生の事例）

第1期生の「30歳のレポート」は、次の方法・手順で行っている。

| 年・期日等 | 内 容 |
|----------------|--|
| 平成11年 2月20日 | 総合学科第1期生 193名卒業（男子17名・女子176名） 総合学科最終課題「30歳のレポート」を課す |
| 平成22年 2月～3月 | 総合学科第1期生 住所確認（往復はがき193通発送） |
| 4月30日 | 「30歳のレポート」第1回実行委員会 （現住所確認返信有り70・返信なし95・住所不明28） |
| 5月 | 平成22年度ハイスクール・チャレンジプロジェクト推進事業の 採択を受ける |
| 5月21日 | 「30歳のレポート」第2回実行委員会 （現住所確認53・実家19・返信なし99・住所不明22） |
| 7月1日 | レポートとアンケートの依頼文172名分 発送 |
| 8月26日 | 第1期生元担任への協力要請（1期生へのレポート提出依頼等） |
| 9月30日 | 第1次締め切り（この時点で12通提出） |
| 10月17日 | 「30歳のレポート」第3回実行委員会 レポート発表者、パネリスト決定（この時点で、23通提出） |
| 10月25日 | レポート及びアンケート再度の依頼（往復はがき150通発送） |
| 10月下旬 | 第1期生在学時の課題研究担当者へ督促要請 |
| 11月20日 | 第2次締め切り（この時点でレポート34通提出） |
| 12月15日 | 第1期生関係者会議（レポートの評価について） |
| 12月末日 | （この時点でレポート36通、アンケート66通提出） |
| 平成23年 1月28日 | 「30歳のレポート発表会」実施 （代表者3名発表、パネリスト2名参加） |
| 2月21日 | 「30歳のレポート」第4回実行委員会 第1期生へのエール、第2期生現住所確認等について |
| 3月中旬 | 第1期生へ「30歳のレポート集」および「エール」発送 |
| 4月30日 | 第1期生「30歳のレポート」最終締め切り |

⑥ 「30歳のレポート」の評価方法

提出された「30歳のレポート」について、観点別評価を行った上で、総合評価として「日田三隈高校API評価」を実施し、その結果を、レポートを提出した卒業生に返信している。「30歳のレポート観点別評価」と「30歳のレポート日田三隈高校API評価」の内容を次に示した。

【30歳のレポート観点別評価】

| 評価の観点 | a | b | c | ※ |
|--|---|-------------------------------------|------------------------------------|--|
| 1 【関心・意欲・態度】 卒業後の社会（家庭・職場・地域・国内外等）に興味・関心を持ち、意欲的に活動しているか。 | 大変意欲的である。 ◎読む者に勇気を与える内容である。 | 意欲的である。 | 意欲が読み取れない。 | 提出されたレポートやアンケートだけでは、いずれとも判断できない場合の評価は「※」で表現する。 |
| 2 【知識・理解・思考・判断・表現】 働くことや職業についての知識・理解があり、社会人としての思考・判断ができ、以上のことが表現できているか。 | 十分に身につけている。 ◎読む者を納得させる内容である。 | 表現できている。 | 表現できていない。 | |
| 3 【日田三隈高校独自の観点】 「4つの力」が身に付き、「生涯に渡って学び続けようとする姿勢」があるか。 | 「4つの力」が十分につき、「生涯に渡って学び続けようとする姿勢」が強い。 ◎読む者に感銘を与える内容である。 | 「4つの力」が身につく、「生涯に渡って学び続けようとする姿勢」がある。 | 「4つの力」や「生涯に渡って学び続けようとする姿勢」が読み取れない。 | |

【30歳のレポート総合評価】

| 総合評価 | | 評価の還元および支援 |
|---------------------|---------------------------------------|--|
| A Achieving Group | 三隈高校キャリア教育卒業グループ | 温かく見守る。時には総合学科の後輩たちにアドバイスを依頼する。1期生ネットワークづくりのリーダーになってもらう。 |
| P Progressing Group | 現在善戦健闘中あるいは苦闘中のグループ | 温かく見守る。状況や要請に応じて支援する。 |
| I Improving Group | 支援を必要とするグループ | 組織的に支援する。担当者やチームを決めて、面談や手紙、電話等で支援する。 (関係職員だけでなく同級生の力も借りる) |
| U Unknown Group | 現時点でレポートもアンケートいずれも提出されてなく、何ら情報がないグループ | 今後も継続して連絡を取り続ける。判明すれば、上記3グループのいずれかであるか判断する。 |

⑦ 「30歳のレポート」の結果と成果

a レポート及びアンケートの提出状況

第1期生の「30歳のレポート」及びアンケートの提出状況は、次のとおりであった。

| | 卒業者数 | レポート依頼数 | レポート提出数 | アンケート提出数 |
|-------|------|---------|---------|----------|
| 男子 | 17 | 16 | 5 | 7 |
| 女子 | 176 | 156 | 33 | 59 |
| 合計 | 193 | 172 | 38 | 66 |
| 回 収 率 | | | 19.7% | 34.2% |

b レポートの評価結果

提出されたレポートはどれも読み応えがあるものであり、卒業後の12年間の歩みが映し出されている。提出されたレポートを大別すると4つに分けられる。①苦労を重ねながらも、自分の進むべき道を何とか探り出そうとしている姿勢が感じられるレポート群、②当初のライフプランの変更を行いながら、自己実現のために生涯にわたって粘り強く学習を継続している姿が感じられるレポート群、③仕事についての喜怒哀楽を素直に表現しているレポート群、④夢や目標が厳しい現実の前に砕かれ、心身ともにボロボロになりながら、改めて自分の人生や目標を立て直そうとしていることが感じられるレポート群である。

提出されたレポートは、ほとんどが、教師や在校生にとって教えられることが多い内容であり、学校から卒業生に支援するとういうよりは、学校が励まされる格好であった。

第1期生の「30歳のレポート」を「日田三隈高校API評価」に基づいて評価した結果、全てのレポートが「Achieving Group」または「Progressing Group」に評価され、レポートを提出した全ての卒業生が、日田三隈高校のキャリア教育を修了することができたと結論付けている。

c 「30歳のレポート」を実施した成果

この成果は大別すると三つ挙げられる。一つ目は、在校生に与えた教育的効果である。「30歳のレポート発表会」での卒業生代表3名の発表は、卒業後の12年間の職業生活、社会生活及び家庭生活における成功、苦難、葛藤などのリアリティーのある話であり、教員には真似できない話であった。生徒は「私もそんな生き方がしたい」、「今しかできないことにチャレンジしたい」、「三隈で学んだことを無駄にしないようにしたい」などの感想を抱き、先輩の話が在校生の学校生活や将来設計等に効果的な影響を与えている。

二つ目は、教職員へ自信や勇気を与えたことである。このレポートは、「総合学科教育やキャリア教育が実社会でどう活かされているか」を検証することであった。この取り組みの中から、教職員は総合学科に携わることができたという「喜び」や「自信」を得ている。

三つ目は、卒業生に対して、自らの生き方を見直したり、見つめたりする機会を与えたことである。レポートの作成にあたっては、12年間の人生の振り返りや、これからの未来を描くことが要求され、主体的に人生を切り拓いていくことを考える機会になっている。また、教師からの激励メッセージをとおして、教師と卒業生、学校と社会のつながりが深まるとともに、卒業生同士のつながりも新たにでき、高校時代の繋がりを再びよみがえらせて、ともに進んでいくという、卒業生の地域コミュニティが形成されている。

⑧ 「30歳のレポート」の今後の展望

このレポートをフィードバックさせ、今後の日田三隈高校の学校運営、教育内容及びキャリア教育等の改善に結びつける取り組みを行っている。

現在、生徒が身につけるべき力として「調べる力」、「まとめる力」、「発表する力」、「聞く力」の4つの目標が設定されているが、この「30歳のレポート」結果を踏まえて、「計画する力」を加えた5つの力を養成するように「育てる生徒像」を再構築するなど、効果的に学校評価活動に活かしていく展望を抱いている。

また、単なるレポート回収率の向上のみにとらわれるのではなく、「卒業後の追指導」及び「総合学科教育の絶え間ない検証」という観点から、今後も継続して実施する予定である。

⑨ 訪問者の所見

この取り組みの優れている点は、総合学科は「短期間に、結果のみを求めるのではなく、プロセスを大切にしながら、丁寧に時間をかけて自己実現を図っていく学科である」という着眼点を持ち、キャリア教育を高校3年間の枠に押し込めずに、卒業後に及んで行うという試みである。そして、その評価（総合学科教育・キャリア教育及び卒業生のライフプラン等）を長期的スパンで行っているところである。教育の営みは総合学科のみでなく、他の学科においても、その評価は短期的評価のみでなく長期的視点でも行われるべきものである。ましてや、キャリア教育の評価はそれを求められる。卒業後12年という年月は、当該年次の担任は転出して不在であることが容易に予想されるが、これらの困難を乗り越えて、この取り組みを実施したところに、日田三隈高校の教職員の総合学科教育にかける熱意が伝わってくる。目下のところ、この取り組みは全国で同校のみであるが、高等学校の全ての学科でキャリア教育が推進される新教育課程では、全学科が参考とすべき取り組みであると評価している。

<参考資料>「30歳のレポート」の事例紹介

早いもので、日田三隈高校を卒業して12年の年月が流れようとしています。12年経つ今でも桜並木を通るとき、新しい制服に身を包み、総合学科1期生として入学した日のことを思い出します。あの頃「30歳のレポート」と言われても、まだまだ遠い未来の事だと思っていたのですが、こうやって、レポートを書いていると「もう30歳になるのだな」と実感せずにはられません。総合学科では「生きる力」という事をよく先生方がおっしゃっていたような気がします。生きる力とは何なのか、私自身を振り返って考えた時に10代から20代前半と20代後半では少し変化していったように思います。三隈高校3年間の総合学習の時間では「聞く力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の4つの柱を中心に、様々な機会を与えていただきました。企業訪問、卒業生に学ぶ、キャリアガイダンスなど、色々な方の話を聞く事で自分の進路に対する意識を高めることが出来ました。また、食品サービス系列の先生や進路指導の先生にも恵まれ、自分の将来の目標を持つことが出来ました。高校生活における「生きる力」とは、将来の目標を持ち、それに向かって進む力だったと思います。大学に進み、新しい環境や新しい友人に出会うことで、これまで知らなかったたくさんのことを教わりました。就職という現実が近づく中で不安や葛藤もありました。新しく出来た友人の意識の高さに刺激を受けることもあれば、自信をなくすことも少なくありませんでした。そんな不安のある状況の中で「自分が自信を持って誇れるものは何か」そう考えた時に高校生活で培った4つの力、それから食品サービス系列で学んだ事を思い出しました。そこで大学1年生の終わりからアルバイトを掛け持ちし、資金を貯め2年生からは夜間で製菓学校の夜間部に通う事を決めました。「これだけは誰にも負けたくない」、そう思えるものがあつたからこそ努力できたのだと思います。大学生活における「生きる力」とは、これまでの自分を見つめなおし、自信を持って誇れるものを見つけ、新しい目標に向かって努力する力だったと思います。また、友人や両親、周囲の方に感謝する事ができるようになったのもこのくらいの時期だったように思います。大学を卒業し、パティシエとして製菓の道を選んだことで、これまで学生で甘えてきた自分を大きく変える機会を頂きました。特に製菓業界は見た目の華やかさとは違い、体力勝負の世界で挫折する事が多く、一番苦しかったように思います。ただ、思い返せば、この時期があつたからこそ気付いた事が沢山ありました。

その後、縁をいただけて、産休代替で三隈高校で家庭科の講師として2年近く勤めさせていただきました。この2年間は、働いていた中で一番充実して、学ぶ事が多かったです。同僚の先生、目上の素晴らしい先生にも恵まれ、また生徒に教わる事が多く毎日が勉強でした。何より、同じ総合学科で学ぶ生徒を通して、自分自身を見つめさせられたような気がします。思い返してみると、小さい頃持っていた「夢」とはお花屋さん、ケーキ屋さんなど、抽象的なものだったのが、高校時代になると「夢」とは「職業」であり、より具体的になりました。この夢を具体化していく作業が、自分を見つめる時間であり、総合的な学習の時間だったのではないだろうかと思います。今、夢を持たない子供が増えていると耳にします。先日目にしたTV番組でも、中学生への取材で「夢がある人、なりたいものがある人」との質問に答えられる生徒はほとんどいませんでした。もちろん、皆の前で発表する事を躊躇した生徒も居たかもしれません。ただ、「なんとなく大学に行って、就職して・・・」と喋っている姿を見て、その現実を知って、私は寂しさを覚えました。目標を持つ事が絶対だとは思いませんが、目標を持つ力が湧いてきます。目標を達成するにはどうすればいいか、自分に必要なものは何か考えます。今の自分では目標に到達できないとわかれば努力するし成長もあると思います。そういうキラキラした成長の時間が総合的な学習を通して作られていったのではないのでしょうか。今はゆとり教育よりも基礎学力の向上が

言われている時代です。もちろん基礎学力は大事だし、そのための時間の確保は絶対だと思います。ただ、「何のために勉強するのか」を明確にすること、将来を見つめる事も大事なのではないかなと思うのです。勉強ありきの目標ではなく、目標ありきの勉強になればと勝手ながら思わずにはられません。

その後結婚をし、まもなく30歳という節目を迎え、新しい生活の中で今またこの「夢」が、職業から生き方へと変わっていています。これまで様々な人と出逢うことで、色々な考えや価値観を聞くことができました。30歳を目前に迎えて感じることは、自分なりの考えや価値観を持つことの大切さです。情報化の現代、色々な情報が飛び交って、正直どれが本当なのかわからないことも多いです。ただ、その時に色々な情報を聞いて、自分で考えることの大切さ、色々な人が、色々な事を言う中で、自分で考えて答えを出す大切さを痛感しています。幸せの形は人それぞれで、幸せを感じるのは自分の心なのに、他人の考えに左右されていたりすることもしばしばです。自分の心を曲げてでも幸せは感じられないので、他人の話に耳をしっかりと傾けつつ、その上で自分できちんと考える、そういう30代になっていこうと思います。この聞く力、考える力、まとめる力を基にした「生きる力」が30代を迎える私の力になっていくのだと思います。

また、今感じているのは、周りの方へ感謝することの大切さです。30歳を目前にして苦難もあるけれど、その度に教えられる事も沢山あり、職場の人、友人、家族に支えられて生きているという事を実感します。そういう当たり前に感じる事が、実は有難いことで、その事に感謝をすることで、幸せな気持ちで沢山頂くことが多いです。暖かい縁に感謝して、沢山の絆をこれから「30代の生きる力」にしていきたいと思います。

(田畑 邦仁・奥村 準子)

(2)「進路意識の涵養」を目指すキャリア教育（兵庫県立伊丹北高等学校の実践）

普通科から転身した総合学科高校として、大学進学を中心とする生徒の進路実現・自己実現に向けた取り組みに成功している兵庫県立伊丹北高等学校を事例校として取り上げる。

(1)学校概要

兵庫県立伊丹北高等学校（以下、伊丹北高と記す）は平成 12 年に前身の普通科高校から転身した。兵庫県伊丹市の北西部に位置し、校地の西端が隣接する宝塚市との市境となる。在籍生徒の居住地は伊丹市内が約 6 割を占め、残りは川西市、宝塚市、尼崎市、猪名川町と、伊丹市周辺市町に分布している。学校最寄の鉄道駅からは徒歩での通学は厳しい距離にあり、自転車での通学生徒が全体の 8 割以上を占める。

総合学科への転身に当たっては、普通科時代から芸術関係の施設に恵まれていたことを生かして、大幅な施設増築の必要のない専門教科を新設している。5つの科目群（人文国際科目群、自然科学科目群、情報メディア科目群、芸術文化科目群、健康福祉・スポーツ科目群）が設定されているが、これは選択科目を規定するものではなく、すべての科目群から自由に科目選択することが可能となっている。約 9 割の生徒が大学への進学を希望しており、毎年難関国公立大学への合格者も輩出している。部活動も活発に行われており、ほぼ全ての生徒が加入している。

(2)3年間のキャリア教育の流れ

学習指導要領で定められている原則必履修科目である「産業社会と人間」を1年次に、「課題研究」（教育課程上は「総合的な学習の時間」）を3年次にそれぞれ2単位設定し、2年次には両者の架け橋となる「総合学習」1単位が配置されている。以下、各科目について、指導の実際についてまとめる。

ア 産業社会と人間（1年次）

伊丹北高では、「産業社会と人間（以下、産社と記す）」を「教育目標を達成するための基幹科目の1つ」として位置づけている。「自己・社会・ライフプラン」を3大テーマとして掲げ、科目選択と進路の相関、職業観や勤労観の育成などが目指される。総合学科特有の多様な科目選択が生徒自身の可能性を広げることができる一方で、将来の進路や行き方を狭めてしまう可能性も指摘している。そこで「産社」を将来の自分の生き方を考える「進路ガイダンス」科目であると規定している。実際の授業展開は「各単元から学び、まとめ（考え）、成果を発表する」ことを基本としており、レポートなどの生徒作品は冊子化して、生徒間で内容を共有できるようにしている。生徒には開設されている多くの科目の中でも最も大変な科目の1つであると伝えている。次の表は、産社の1年間の流れを示したものである。自己を知ることから始まり、社会（職業）とのかかわりを持ちながら、進路意識や職業観・勤労観を培いながら、2・3年次の科目選択を行う。そして年度末の総合学科発表会に向けて、1年間の産社での学習を総括していく。これらの学習で常に求められているのは、自己と社会と向き合い、考え、文章にまとめ、人前で発表すること、そして人の話を聴くことである。こうした訓練を繰り返すことで、個々人の自己理解と他者理解、職業・社会理解がより一層深まるとともに、発表技術の醸成やコミュニケーション能力の

育成などにも貢献している。

表3-2-1 伊丹北高等学校「産業社会と人間」年間授業計画

| テーマ | 月 | 自己理解 | 履修計画作成 | 社会・職業理解 |
|---------------------|-----|-------------------------------------|---------------|-----------|
| 導入 | 4月 | 産社ガイダンス／進路適性検査 野外活動（集団行動、ライフプラン） | | |
| 自己を知る | 5月 | 進路適性検査まとめ | 職業探求／学部学科研究 | |
| 体験学習に向けて | 6月 | 2分間スピーチ | 科目選択説明 | |
| 体験 | 7月 | | 科目選択仮登録 | 自主体験学習準備 |
| | 8月 | 夏季休業中 自主体験学習 | | |
| 自己表現 | 9月 | | | 自主体験学習発表会 |
| 集団での発表体験 | 10月 | | 科目選択本登録 | 進路校外学習 |
| | 11月 | | | 進路校外学習発表会 |
| 産社学習の総括 | 12月 | ライフプラン | 産社を学んで（ふりかえり） | |
| 学んだ成果の確認 発表技術の集成 | 1月 | 総合学科発表会準備 | | |
| 自己の成長を伝える | 2月 | 総合学科発表会、後輩への手紙 | | |

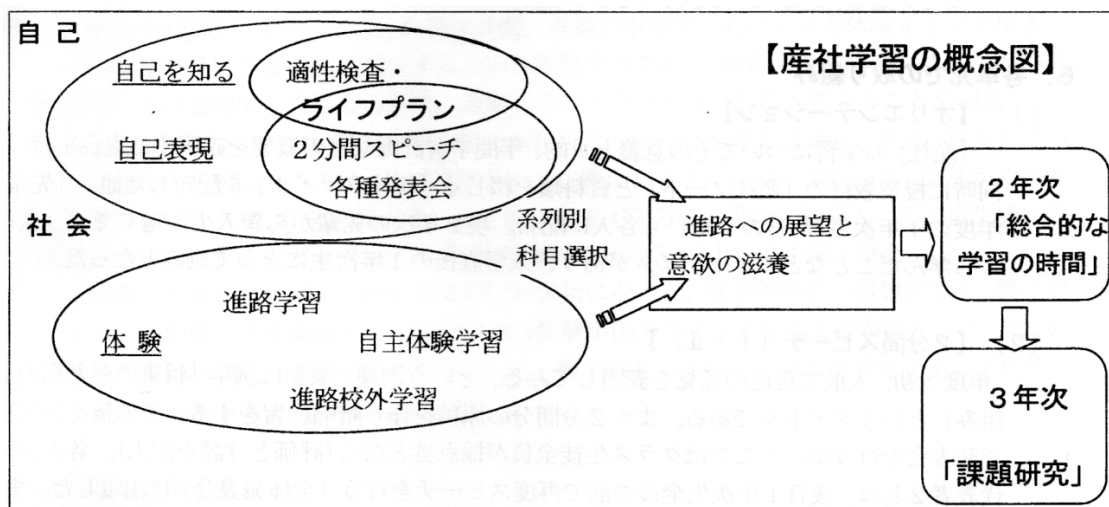


図3-2-1 伊丹北高等学校の産社学習の概念図（伊丹北高等学校提供資料より）

次に、各単元の取り組み内容について、簡単にまとめる。

① オリエンテーション

産社学習の意義と目的、年間学習計画などの概要を説明し、独自に作成した「産社ノート」と資料を綴じる「産社ファイル」を配布する。また、「先輩（昨年度の1年次生）からの手紙」を配布して、生徒目線からの産社学習へのアドバイスを伝える。

② 2分間スピーチ

入学してすぐに行う人前で自己の意見を表明する訓練である。タイトルは「将来の夢と私の取り組み」として、2分間分の原稿を作成し、暗唱させる。クラス単位で発表会を行い、生徒による相互評価を行う。各クラスの代表者2名は、1年次全員の前で全体発表会を行う。

③ ライフプラン

自分の生き立ちから将来まで想いを馳せることで“充実した生き方とは”ということを探求させる。「インタビューゲーム」を実施して、自己の内省と他者の多様な生き方を知る。年末に最終的なライフプランの作成を行う。

④ 職業探求・学部学科研究

職業の種類や多様な学問の世界を知らせることを意図して、事前に行っている進路適性検査結果に基づき、関心のある職業調べなどを行う。職業に関する視野の拡大や上級学校への進路意識の醸成につながり、「科目選択」への一助となっている。

⑤ 科目選択

ライフプランや関心にしたがって多様な科目の中から科目選択を行うのが総合学科の特徴である。伊丹北高では学問の系統性などから5つの科目群を設定しているが、これらはいくまで科目選択の目安として提示しているにすぎない。1年次7月中に三者面談を実施し、時間割に保護者署名・捺印をもらったうえで仮登録を行う。9月末までには本登録を行い、調整期間を経て10月中には最終決定する。科目選択は2・3年次分まとめて選択する。ただし2年秋に3年次科目の変更を認めている。産社の年間計画や施設等の条件から、科目選択コンピュータ入力は産社ではなくLHRや放課後などを利用する。

⑥ 自主体験学習

夏季休業中の3日間に近隣の事業所において就業体験を行い、その内容を9月に報告する課題学習である。生徒自らが体験希望の事業所を探し、教員が事前に連絡を入れたうえで、生徒が直接交渉を行う手順を取っている。働く楽しさや社会の厳しさを実感させる絶好の機会である。

⑦ 進路校外学習

学部学科研究をふまえ、5つの科目群の学問分野に合わせて用意された訪問先に分かれて1日上級学校訪問をする。その見学内容は11月下旬に舞台発表という形式で総括する。

⑧ 産社を学んで

入学以来、「産社」に取り組んで何を学び取ったか、またそれを進路にどう生かすかを約1600字の小論文にまとめさせる。

⑨ 総合学科発表会

本行事は1~3年生のそれぞれの学習成果を内外に公開する学校行事である。発表会の準備・運営はすべて1年次生が行い、舞台班・展示班・冊子班に分かれて分担し、行事を自主的に運営する技術を体得する。

⑩ 後輩への手紙

次年度入学してくる生徒に向けて、産社学習の意義や成果、アドバイスなどを生徒目線で執筆させる。

産社の授業運営は 15 名の教員によって行われる。内訳は、1 年次担任団 9 名（担任 6 名、年次主任・副主任、副担任）、産社専任 1 名（総合学科推進部と 1 年次団の両組織に所属）、年次外 5 名（国語、理科、体育、英語、総合学科推進部長）である。伊丹北高総合学科立ち上げ当初より受け継がれている産社担当教員に求められる力として、情熱力、協働力、交流力、共学力、提示力、技能指導力、感動力の 7 つが提示されている。

伊丹北高総合学科を支える基幹科目として、これまでの実践の蓄積を生かしながら、年々進化を遂げている。また、産社単独の学習で終始することなく、2・3 年次の総合的な学習の時間へと学習の効果が継続されている。伊丹北高のキャリア教育を効果的に運営していくために、年度当初に総合学科推進部作成の 30 頁にわたる「産業社会と人間・総合学習・課題研究 基本要項」冊子が各教員に配布される。冊子の内容は、総合学科の理念、産社・総合学習・課題研究などの授業計画や教員の役割分担・評価方法、次年度への申し送り方法、年間行事計画などを記載している。この冊子を用いて伊丹北高が目指すキャリア教育の全体像と具体的手段について教員間での共通理解が図られる。こうした教員の研修成果もあって、過去 6 年間の卒業生アンケートでは、78%の生徒が「産業社会と人間」の授業は「意味があった」と肯定回答している。

イ 総合的な学習の時間（2 年次・3 年次）

学習指導要領で定められている「総合的な学習の時間」3 単位のうち、2 年次で「総合学習（以下、総学と記す）」1 単位、3 年次で「課題研究」2 単位として分割実施している。それらの学習内容とその他の学習との関係性を下図のように示している。

産社と課題研究の間で空白になりがちな 2 年次において、以下の 3 つの柱をもとに総学の学習を展開している。

a. 総合学習（2 年次 1 単位）

①産社の発展

1 年次の産社で培った“学び、考え、発表する”という経験を土台に、新たな学習課題に取り組みさせる。進路学習としては、大学などの先生を招いての「上級学校授業」や「卒業生講話」などを通して、産社に引き続き進路実現に向けて着実に歩みを進めていく。また、詳細は後述するが、修学旅行の事前事後学習の成果をまとめてクラス発表、全体発表を行うなど、産社に引き続き、学習成果の発表というスタイルは一貫している。

②国際理解学習

11 月に実施しているマレーシアへの海外修学旅行の事前事後学習を総合学習として実施している。異国文化に触れる前に自国文化や伝統への理解を深める「日本文化探求」や訪問先のマレーシアについての理解を深める「マレーシア学」などの事前学習に取り組みさせる。現地では大学生との交流を通して日本と異なる伝統や価値観に触れ、国際社会に目を向ける契機としている。また、帰国後は報告レポートを作成させる。

③課題研究の基礎固め

プレ課題研究として、先輩の研究発表を視聴したり、論文の読解演習をしたり、研究というものに触れる作業から始めて、丁寧に研究の素地をつくっていく。そして研究の素案づくりにとりかかる。また、特色ある取り組みとして、ディベートを取り入れている。1 年次から“発表する”ということに関してはかなりの回数を重ねている。そして

課題研究に取り組むにあたっては、他者から学び取るということが重要になる。そのため、ディベートでは「聴く力」と「論理的思考力」の育成に重点を置くとともに、議論の面白さ、チームワークの重要性などにも気づかせる取り組みとなっている。

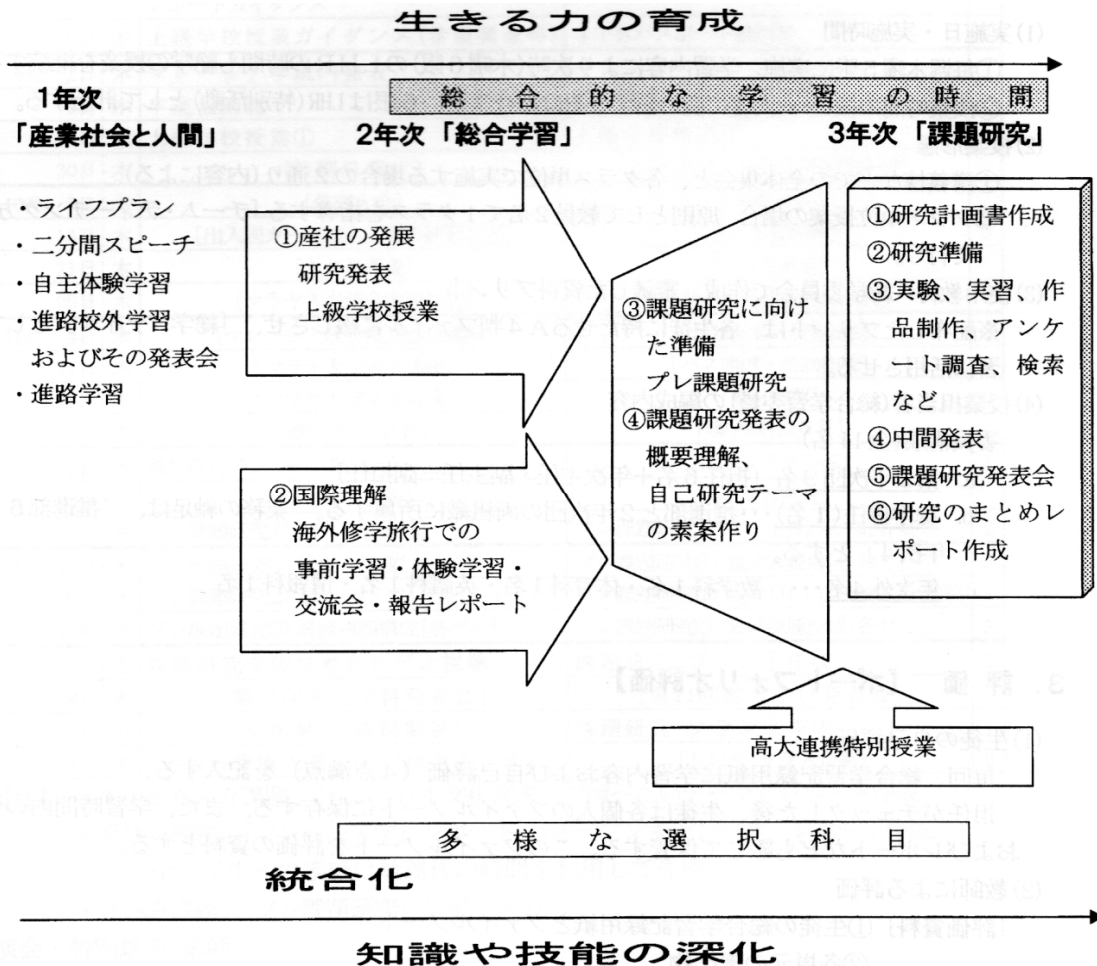


図3-2-2 伊丹北高等学校の「総合的な学習の時間」の学習展開
(H22年度伊丹北高等学校総合学科発表会 総合学科概要資料より)

b. 課題研究（3年次2単位）

生徒が興味・関心・進路等に応じて設定した課題について研究し、知識や技能の深化、統合化を図ることを目的としている。生徒は最終的に4000字以上の小論文か作品（簡易レポート1200字程度を添える）のいずれかを完成させる。教員は生徒の希望する細分ジャンルごとに20名で担当し、教員1人あたり10名程度の生徒を受け持つ。グループ別発表会、全体発表会などを経て選ばれた生徒は2月に行われる「総合学科発表会」にて代表発表する。2単位と限られた授業時間の中で研究させるため、研究の質の維持には苦勞しているという。特に大学受験を控えた生徒にとっては、研究の仕上げの段階と受験が日程的に重なり、双方を両立することが求められている。

(3)教育課程の特徴

ア 教育課程の編成

普通科母体の総合学科として、多彩な進路の可能性を開く教育課程を展開している。大学進学に対応した演習科目から、特色ある専門科目まで多様な科目を設定している。開講科目は136科目（平成22年度実績）、うち36の専門科目、22の学校設定科目を開講している。表が示すように、必修科目の多くは1年次に配置し、2・3年次はほとんどが選択科目になる。また、必修科目のうち、地歴と理科の選択必修科目の選択を生徒に行わせている。例えば地歴の場合、世界史AまたはBが必修であるが、選択枠の中での選択希望科目の重複の回避や文系・理系など進路に合わせた選択ができるように、2・3年次合わせて7つの選択枠の中から選択させるようにしている。また、2・3年次選択の同一展開（異学年共習）を導入しており、受講者を確保するとともに、2・3年次にわたって多様な選択が可能になるように配慮している。

稀なケースではあるが、不登校や長期入院などが原因で単位修得が困難な生徒に対しては、特例として高校卒業程度認定試験による単位認定を行うこともあるという。ただし、このことについては教務内規には明文化されていない。

10 平成23年度入学生 教育課程

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
|-------|--|---|----|--|------|---|----------------------------------|---|---|--|----|-----|---------|---|-----------------------------|-------------------|------------------------|--|---------------------|-------------------|---------|--------------|--------|------|--|-----|-----|---------|----|-----|
| 1年次 | 国語総合 | | | 現代社会 | | | 数学Ⅰ | | | 数学A | | | 理科総合A | | | 体育 | | 保健 | | 音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ | | 英語Ⅰ | | 家庭基礎 | | 情報C | | 産業社会と人間 | | LHR |
| 2年次 | 体育 | | 保健 | | 総合学習 | | 英語Ⅱ | | | 現代文α① | | 古典① | | 日本史B① 世界史B① 地理B① 物理Ⅰ 化学Ⅰ 生物Ⅰ | | 物理Ⅰ 化学Ⅰ 生物Ⅰ | | 理系地理B① 日本史A 世界史A ライティング① 数学B | | ライティング① OCⅠ | | 数学Ⅱα 数学Ⅱβ | | OCⅠ | | LHR | | | | |
| 2・3年次 | 理科基礎 | | | 情報B | | | 美術史 | | | 戯曲研究 | | | 理科総合B | | 郷土研究 | | 情報と表現 | | 日本史A | | 数学基礎 | | 実用書道 | | 生活科学 福祉基礎 文学史研究 産業世界史 国際関係 P・S・A 生涯スポーツ 中国語調和体 基礎科学 伝世数学 | | LHR | | | |
| 3年次 | 日本史B② 世界史B② 地理B② | | | 福祉実習 理系デザイン スポーツB 陶芸B ジャズⅡ | | | 職業・ベンチャー デザイン 発達と保育 | | | 福祉技術 ピアノ中級 クラフトデザイン スポーツ科学Ⅱ 被服製作 | | | 絵画Ⅱ | | ダンス OCⅠ 数演マーク 英語演習 | | 現代文γ② 古典演習 P・S・B | | 国語表現Ⅱ | | ライティング③ | | 生物演習 | | 古典演習 国語表現Ⅱ 政治経済 英語演習 生物演習 | | LHR | | | |
| 3年次 | 数学Ⅲ 数演マークT 生物演習T デザイン 創作書道 | | | 英語演習 世界史演習 日本史演習 地理演習 | | | 物理演習 化学演習 数演マーク ライティング② | | | OCⅠ 現社演習 倫理演習 古典演習 数演マーク 看護医療数学 理系地理B② | | | ライティング② | | リーディング | | 数演記述理系 現代文β②② | | 現代文α② 物理Ⅱ 生物Ⅱ | | ライティング③ | | リーディング | | 数演記述文系 数学C | | LHR | | | |

- ・ 選択人数によっては開講しない科目もあります。
- ・ 2年次 3年次の科目は、変更される場合もあります。

表3-2-2 伊丹北高等学校 平成23年度入学生 教育課程表

(平成23年度伊丹北高等学校 学校要覧より)

イ 特色ある専門科目

①「ジャズⅠ」(芸術文化科目群 専門教科 音楽)

この科目は総合学科開設当初からある専門科目である。生徒各自が得意とする楽器を用いて演奏能力の向上を図ることとジャズ独特のリズム感、フィーリングを得ることが科目の目的としている。実際の授業では、各自パートに分かれて練習をし、ジャズを演

奏するうえで欠かすことのできないアドリブ（即興演奏）力を養成するため、コードの構成音によるスケール（音階）を学習し、各自が考えたアドリブを楽曲内で披露する。練習の成果はオープンハイスクールや総合学科発表会にて演奏する。

②環境科学（自然科学科目群 学校設定科目）

身の回りの様々な環境（自然・衣・食・住・人間関係など）について学ぶ科目である。校内に分布するタンポポの調査、有機農法によるサツマイモの栽培から調理までの実習、学校前の池の水質・生態系調査など、実習と講義を通して様々な角度から環境問題についての知見を深めている。

③戯曲研究（人文国際科目群 学校設定科目）

戯曲の構造の分析を通して、作品に現れた言葉の働きや表現上の特色を理解し、そこに描かれた様々な人生の喜怒哀楽を味わうことを目的としている。戯曲や演劇を通して様々な生き方や人生に触れることができ、キャリア教育としての機能も持ち合わせている。また、演劇指導については「劇表現」という科目を設定しており、兵庫県立ピッコロシアターより非常勤講師を招いて専門的な立場から指導を行っている。

(4)訪問者の所見

前述の総合学科特有の学びを通しての「進路意識の涵養」が伊丹北高のキャリア教育の軸となる。進路実績を見ると、毎年難関大学合格者を多数出しており、進学指導に重点を置いた総合学科高校に見えてしまう。しかし、「進学型総合学科ではない」と断言しており、実際の進路指導においては必ずしも大学進学を推すことはしていないという。入学段階で大学進学希望者が多く、こうした意識を3年間のキャリア教育を通して発達させ、自ら進学に向けて前進し続けているということであろう。AO入試や推薦入試を希望する生徒は極めて少なく、ほぼ全員がセンター試験を含めた一般入学試験での大学合格を目指している。総合学科では一般入試で合格する学力はないが、「課題研究」などの特色ある学習の成果を生かしてAO入試や推薦入試で大学に進学するといったケースが多いが、この学校ではほぼ無縁である。こうした学習への原動力は1年次の「産業社会と人間」の学びにあった。1年間の産社を通して、自己や社会について理解し、職業や学問に触れながら、2・3年次の履修計画をたて、将来の職業などを含めたライフプランを組み立てていく。そして2年次以降の授業のほとんどが自分で選択した科目であることや産社で考えた自分の将来を見据えて学習していることも能動的な学習を加速させている。補習授業や進学向けの演習科目が揃っていることも一般受験を成功させる一助となっていることであろう。一方で、志望する分野のために短期大学や専門学校を志望する生徒に対しても、彼らの自己実現のための支援は惜しまない。一人一人の自己実現を第一に考えており、それをサポートするのが伊丹北高の3年間のキャリア教育なのである。

しかし、年々上級学校への進学率が上昇するにしたがって、総合学科としての学校のあり方についての課題は多い。高校や社会全体が大学受験至上主義に陥ってしまうと、受験科目ではない専門科目を学ぶ意味を生徒が見いだせなくなってしまう恐れがある。そうすると第三の学科としての総合学科は普通科となら変わらない状況になってしまう。また、3年次の課題研究のあり方についての検討も必要である。総合学科での学びの集大成として、調べ学習ではない研究として成立させるための指導と大学受験との両立を目指させる

ための指導の工夫が求められている。また、公立校であるため教員の人事異動もあり、総合学科の理念の継承などにはひと工夫必要である。そこで伊丹北高では、前年度の反省を踏まえての「基本要項」冊子が毎年作成され、総合学科の理念の確認、3年間を見通したキャリア教育が計画されており、教員間の共通理解が図られている。特に新着任の教員には冊子を用いての入念な研修が行われるという。

進路実現へのエンジンのかけさせ方に成功している事例校として、伊丹北高を訪問させていただいた。ところが、実際のところは大半を占める大学進学を希望する生徒に対して、大学受験に直結する教科指導はもちろんのこと、むしろ産社や総合学習などのキャリア教育に特に注力している。これは大学進学など目の前の短期的な進路実現よりもその後の人生における自己実現に重点を置いており、3年間のキャリア教育を通して、自分の力で人生を切り開いていける生徒を育てようと、学校を挙げて取り組んでいる様子を伺うことができた。こうした取り組みの成果は、総合学科1期生の時から実施している卒業時生徒アンケートにも如実に表れており、卒業生の約6割が「中学生に伊丹北高校総合学科を薦める」、約8割が「伊丹北高校総合学科で高校生活を送ることができて満足できた」、約8割が「科目『産業社会と人間』の授業は意味があった」と回答している。

日々のキャリア教育の成果として大学進学実績が顕著であるということなのであるが、生徒一人一人の自己実現のためのキャリア教育のあるべき姿を実行し、その経過としての進路実現を最大限サポートしている伊丹北高の指導体制は、総合学科のみならず普通科高校も含めたキャリア教育の模範となる事例である。

(今野 良祐・竹内 義晴)

3-4 「産業社会と人間」の学びと高等教育、初等及び前期中等教育との関係性

多様な生徒が入学し学ぶ総合学科、その柱となる科目「産業社会と人間」、その科目での学びがその先の進路とどうかかわるか、ここでは、進学と就職に分けて、進学は文部科学省の「学士力」、就職は経済産業省の「社会人基礎力」と対比させて考えていきたい。

なお、本科目は高校でのキャリア教育との軸となるものでもあるので、小中学校のキャリア教育との連携も考察する。

(1) 学士力と「産業社会と人間」の学び

① 学士力とは

文部科学省の示す「学士力」は次に示す4分野13項目に分けられている。

<知識・理解>

- 多文化・異文化に関する知識の理解
- 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

<汎用的技能>

- コミュニケーション・スキル
- 数量的スキル
- 情報リテラシー
- 論理的思考力
- 問題解決力

<態度・志向性>

- 自己管理能力
- チームワーク、リーダーシップ
- 倫理観
- 市民としての社会的責任
- 生涯学習力

<統合的な学習経験と創造的思考力>

- 獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

② 学士力と「産業社会と人間」

前項であげられた「学士力」、この基礎となるスキルや力を、[3-2-(1)]であげられている「産業社会と人間」における代表的な学習活動にあてはめてみると、次のようになる。

自己理解ーコミュニケーション・スキル、自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ

社会理解ー多文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解、倫理観、市民としての社会的責任

職業理解ー人類の文化・社会と自然に関する知識の理解、市民としての社会的責任、生涯学習力

履修計画ー獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

なお、ここに入れられなかった「数量的スキル」「論理的思考力」については教科「数学」で、情報リテラシーは教科「情報」で身につけられるものである。また、「問題解決力」と<統合的な学習経験と創造的思考力>については、当初、総合学科の必修科目であった「課題研究」にて身につけられるものであったが、学習指導要領の改訂で「総合的な学習の時間」に置き換えられたものとする。

③ 進学（大学・専門学校等）と「産業社会と人間」

総合学科の必修科目である「産業社会と人間」、そこでの学びの延長上に、大学や専門学校等への進学がある。総合学科の場合は、本科目で十分な検討がなされ、「履修計画」として形作られ、2・3年次の学習につながる。いわば、「なりたい自分」が描かれ、それに向かって、着々と準備をしていくという流れである。統計的なものは出されていないが、第6章の卒業生へのインタビューに、その成果が言葉として表されていると考えられる。

④ 「産業社会と人間」での学びを高等教育機関（大学・短大・専門学校）へ

総合学科が初めて開設された平成6年当時、高校から高等教育機関への進学率はあわせて約50%（文部科学省；学校基本調査）であった。平成22年度になるとその数字は約80%にまで跳ね上がっている。5人いれば、そのうち4人までが高等教育機関への進学となり、学びを続けていることになる。こういった状況を受けて、平成23年1月末に出された中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」の中で、「幼児期から高等教育まで、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要性がある」と述べられている。

現在の80%にもものぼる進学率、これは後述の就職率の裏返しでもあり、高校卒業生への労働需要の縮小を物語っている。高等教育を受けなければ就職ができないというジレンマのもと、多くの高校生が進学を選ばざるを得ない状況になっているとも言える。中学校から高校へも偏差値で、高校から高等教育機関へも偏差値でという状況に拍車がかかっている状況である。行きたい大学等（他の高等教育機関も含む）から、行ける大学への進学になっており、その中で、大学へ進んでも、退学・転学・休学と自分探しがとまらないのが実態でもある。

重ねて、平成23年度から大学設置基準が改正され、「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成し教育課程の内外を通じて、全学的に取り組むこと、その体制を整えること」が盛り込まれている。なお、それに先んじて文部科学省は、「大学生の就業力向上プラン」をとりまとめ、その中で「大学生の就業力育成支援事業」を平成22年度から26年度の5年間の事業として実施している。当初は130件の採択予定数を大幅に上回る180件の採択に至ったことも事（こと）の重要性を表している。

幼稚園から中学校まで、様々な形でキャリア教育がなされているのは事実である。しかし、それは中核となるものではなく、また、発達段階の中でも中途半端になりやすいものである。高校1年時に「産業社会と人間」において、それまでの義務教育の9年間を振り返り「自己理解」を行い、「社会理解」や「職業理解」を行って、ライフプランを設計し、その過程での高校時の「履修計画」とその先の進学先、いわば、高大の7年間を通した設計し、就職を考えられることが理想である。特に、自我を確立する高校時には、「自分が選んだ」という「自己責任」を持たせることが高校を狂わせることがない柱となる。学びの折り返し地点でのこの学習活動は、高校以降の学びを格段にレベルアップさせる。

現行の高等学校学習指導要領においては、「生徒の選択履修の幅をできるだけ拡大すること」が言われており、さらに、「学校設定科目として「産業社会と人間」を設けることができる」と第1章総則の第2款 各教科・科目及び単位数等の5 学校設定教科の(2)で取り上げられている。それは、それだけ本科目に対する期待があるということであり、総合学科のみならず、普通科・専門学科においても導入が望まれるという期待が裏にあると読みとれる。しかしながら、「産業社会と人間」は総合学科以外には浸透していない。ただ、高等

教育機関での学生の状況や近年の高等教育機関でのキャリア教育の現状を見たとき、高校1年時に「産業社会と人間」がしっかりと展開されていればと思わざるを得ない。それは、伸びしろの一番大きい時代の高校であること、また、生徒と教師の間が近いということ、キャリア教育に適した人材がいることもある。

(2) 社会人基礎力と「産業社会と人間」の学び

①社会人基礎力とは

経済産業省の示す「社会人基礎力」は、次の3能力12要素となっている。

<前に踏み出す力>

- 主体性
- 働きかけ力
- 実行力

<考え抜く力>

- 課題発見力
- 計画力
- 創造力

<チームで働く力>

- 発信力
- 傾聴力
- 柔軟性
- 状況把握力
- 規律性
- ストレスコントロール力

②社会人基礎力と「産業社会と人間」

前項であげられた「社会人基礎力」、この基礎となる能力や要素を、[3-2-(1)]であげられている「産業社会と人間」における代表的な学習活動にあてはめてみると、次のようになる。

自己理解—主体性、課題発見力、状況把握力、ストレスコントロール力

社会理解—課題発見力、傾聴力、状況把握力、規律性

職業理解—働きかけ力、実行力、課題発見力、発信力、傾聴力、柔軟性、規律性、ストレスコントロール力

履修計画—主体性、計画力、創造力、発信力、傾聴力、状況把握力

③ 就職と「産業社会と人間」

平成22年度の高校卒業者のうち、17.2%の生徒が就職（一時的な仕事に就いた者も含む・文部科学省：学校基本調査）をしている。就職者率については、専門学科卒業の生徒が50%前後、総合学科が25%程度、普通科は10%程度となっており、それぞれの学科の特色が出ている。なお、進学も就職もしていない者が5.6%もいるのも大きな問題である。

就職者にとっては、「産業社会と人間」で取り扱う内容はきわめて現実的なものであり、社会人基礎力との関係も、より現実的な表現にもなっている。それらを見極めての学習は、効率的であり、学習効果も高い。学科別の離職率の統計がないため、推論でしかないが、「産業社会と人間」の学習効果は高いものと思われる。なお、高校卒業生への労働需要の縮小が就職者の割合を落としているという現状もあり、昨今の経済不況がこの状況に大きく影響をしていることは否めない。

④ 「産業社会と人間」での学びを就職へ

絶対数が少なくなっているとはいえ、高卒後にすぐ就職する生徒には「社会人基礎力」を身につけさせておくことが必要である。それが、離職率を抑えるのに役立つ。そういったことから、再度、「産業社会と人間」で身につけさせるべき「社会人基礎力」を具体的な例を挙げつつ見てみる。(http://www.nikki.ne.jp/kisoryoku.html より引用)

.....

【社会人基礎力】

「社会人基礎力」とは、経済産業省よって「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」（「社会人基礎力」）を定義された「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力。

1 「前に踏み出す力」（アクション）

～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～

実社会の仕事において、答えは一つに決まっておらず、試行錯誤しながら、失敗を恐れず、自ら、一歩前に踏み出す行動が求められる。失敗しても、他者と協力しながら、粘り強く取り組むことが求められる。

2 「考え抜く力」（シンキング）

～疑問を持ち、考え抜く力～

物事を改善していくためには、常に問題意識を持ち課題を発見することが求められる。その上で、その課題を解決するための方法やプロセスについて十分に納得いくまで考え抜くことが必要である。

3 「チームで働く力」（チームワーク）

～多様な人とともに、目標に向けて協力する力～

職場や地域社会等では、仕事の専門化や細分化が進展しており、個人として、また組織としての付加価値を創り出すためには、多様な人との協働が求められる。自分の意見を的確に伝え、意見や立場の異なるメンバーも尊重した上で、目標に向けともに協力することが必要である。

次に、具体的に3能力を12の要素に分けて考えて、例を示す。

○前に踏み出す力（アクション）

- ・主体性—物事に進んで取り組む力

例)指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけ積極的に取り込む

- ・働きかけ力—他人に働きかけ巻き込む力

例)「やろうじゃないか」と呼びかけ目的に向かって周囲の人を動かしていく

- ・実行力—目的を設定し確実に行動する力

例)言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。

○考え抜く力（シンキング）

- ・課題発見力—現状を分析し目的や課題を明らかにする力

例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。

- ・計画力—課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力

例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のもの何か」を検討し、それに向けた準備をする。

- ・創造力—新しい価値を生み出す力

例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。

○チームで働く力（チームワーク）

- ・発信力－自分の意見をわかりやすく伝える力
例) 自分の意見を分かりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
- ・傾聴力－相手の意見を丁寧に聴く力
例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
- ・柔軟性－意見の違いや立場の違いを理解する力
例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
- ・状況把握力－自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
- ・規律性－社会のルールや人との約束を守る力
例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
- ・ストレスコントロール力－ストレスの発生源に対応する力
例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

.....

ここまで解説すると、かなりわかりやすくなってくる。一つ一つ見ると社会人として仕事をしていくためには必須のものであるが、その習得はそれほど難しいものではない。これらを意識して、「産業社会と人間」の指導計画の立案にかかるべきであり、ここで身につけられたものは、高等教育機関の進学者へのキャリア教育の出発点ともなる。

(3) 「産業社会と人間」と「学士力」、「社会人基礎力」

ここで取り上げた「学士力」(文部科学省)、「社会人基礎力」(経済産業省)については、大学生を対象としたものである。しかし、第14期中央教育審議会が「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」と題する答申を出したのは、平成3年(1991年)であり、それから20年を過ぎている。当時の学齢期の発達段階と現在のそれを比べると大きな差があり、また、高等教育機関への進学率が50%から80%へ上昇する中で、それまで初等中等教育の中で収まっていた学力の習得やキャリア意識の習得が、高等教育機関へ移行してきたということがあり、20年前であれば明示するまでもなかった「学士力」「社会人基礎力」の習得を各省が大学生に身につけさせるべき能力としてあげざるを得なくなったと考えられる。これは、前述の不況による高校卒業者への労働需要の縮小が影を落としていることもあるが、平成23年1月末に出された中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」の中で、「幼児期から高等教育まで、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要がある」とされている以上、どこかが主体となってそれらを担う必要があると思われる。それはやはり、学びが多様化する高校教育段階であり、そこで、科目として位置づけた「産業社会と人間」での展開が必要であると考えられる。それにより、キャリア発達が促進されるとともに、高等教育機関への目的のある進学、社会人基礎力を身につけた就職ができる。

平成3年に出された中教審答申は、今になって振り返ると画期的であったかもしれない。しかしながら、教育界全体がその理念を理解できず、全てが中途半端になったと思わざるを得ない。筆者も「産業社会と人間」という科目を初めて目にしたのは平成4年である。

その際は、教科「社会」の科目であると思っただけである。しかしながら、その後の経緯から、本科目を担当するようになると、キャリア教育そのものであり、その奥深さを感じ取ったものである。奥深さは、その分野に入り込もうとすればする程きりが無い。その深掘りを教師がどう感じるかである。教師の本質はどこにあるのか。そこで問われるのは、今、そこにいる生徒のためにどう関わり、その後の将来にわたる進路にどう関わり責任を持つかである。「産業社会と人間」をしっかりと展開すれば、目的意識をもった生徒を育てることができ、その後の生涯にわたる進路の指針をしっかりと示せると考えた。筆者の場合、平成6年から当時の勤務校の総合学科完成年度の平成9年度まで、科目開発にかかわり、その後、「産業社会と人間—よりよき高校生活のために—」(学事出版・共著)、「キャリアVIEW—高校から大学、大学から社会へのスムーズな移行を目指して—」(学事出版・共著)と「産業社会と人間」及び高大接続及び入学前教育としてのテキスト発行に至っている。さらに、筆者の現在の勤務校(大学)では、後者のテキストから筆者の担当部分を抜粋し「入学前キャリア講座 自分を見つめる 高校から大学へのスムーズな移行を目指して」をAO及び推薦選抜者に配布し、入学前教育を充実させている。

いずれにせよ、再掲になるが、平成23年1月末に出された中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」の中で、「幼児期から高等教育まで、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要がある」は大いに評価できるが、現在の社会情勢を見て、慌てて言い出されたと思えない。20年前に出された答申に対して、十分な支援策(これは、総合学科や科目「産業社会と人間」も含む)をとらず、現在の高校及び高等教育機関の卒業者の就職状況、ニート、フリーターの増に危機感を感じ、慌てて出されたもののように感じざるを得ない。幼児期から高等教育機関までという、20年以上にも及ぶと考えていい。オーバー・ドクターの存在も含めるともっと長期でもあるかもしれない。この答申がすぐに実行されたとしても20年、それぞれにばらばらの実施主体をどこがどうまとめるのか、これを明記しないことには結局「絵に描いた餅」であろう。

現在のキャリア教育は、結果として、高等教育機関が担っている。専門学校等は学習目的が明確であるのでやりやすい(しかし、ここでも学習内容とのミスマッチで退学などの問題も生じている)。一方、大学はどうであろうか。筆者は、高校でキャリア教育を行い、現在は大学で教鞭をとっている。その経験から言うと、高校は教育者であり、大学は研究者なのである。キャリア教育はあくまでも「教育」なのであって、それを専門に研究する研究者はいても、普通の研究者にキャリア教育を求めることはできない。それが厳然たる事実である。結果として、キャリア教育自体は、大学の周りにある関連するNPOや業者が担っているのが事実であり、そのレベルも、筆者の経験から言えば、総合学科の「産業社会と人間」そのままである。だからこそ、今の現実があるのである。

大学のレベルが低下していることが言われているが、それは、この国の教育施策の問題である。大学へ入ることが目的で、そこに入って初めてキャリア教育を受けて愕然とする、それが実態である。しかし、修正する間もなく、大学生であれば3回生の11月から就活が始まる。多くの学生は入れる大学へと目的意識を持って入らず、専門移行をして、やっとなにがしかの知識を身につけようとした矢先に、就活である。よっぽどの将来が約束されたような有名大学以外は、専門性をもつどころか、就活予備校みたいになっているのが現実である。講師は、学外の講師(NPO・業者)。主従逆転も甚だしい。

答申で「幼児期から高等教育まで、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要性がある」と出されている以上、その主体を文部科学省が明確に発信しないと結局責任のなすりあい、悲劇の主人公は、「児童・生徒・学生」である。消えた20年は取り戻せない。これから、この20年を取り戻しつつ、新たな20年で大きな一歩を踏み出さないと、日本は崩壊・沈没する。その危機感があるかどうか問われている。

(4) 初等及び前期中等教育のキャリア教育と「産業社会と人間」の関係性

小学校や中学校でもキャリア教育とまでは位置づけなくても、様々な形で類似の活動が行われている。多くの小学校での校外学習はそれにあたりと考えると良い。生活科も含めて、教科学習の中でも多くの工夫が見られ、筆者のように高校・大学教員の立場から見ると、生きたキャリア教育と位置づけられるものが多い。地域密着であるが故のなせる業でもあるが、小学全科といった形の免許であり、弾力的な運用がかのうであるからでもある。しかしながら、発達段階として、キャリア教育の柱とはなり得ないのが事実である。現実をありのままに見せて、判断させる能力はない。小学生から「将来は正社員になりたい」という言葉を吐かせてしまうのは酷である。

中学校はどうであろうか。教科として独立した教育が行われるようになり、HR等で取り上げられたり、職場体験学習（5日間を目安としたことで充実したものになっている）で深まりが見られるが、進学率がほぼ97%の中で、さらに、塾や保護者からの進学圧力がかかる中で、その体験学習を振り返り、それを高校選択に生かされることはわずかである。本音で言えば、よっぽどの変わり者かキャリア発達が進んだ生徒が専門学科や総合学科を選び進学をし、ほとんどの生徒は無難な普通科を選ぶこととなる。進学が前提となる中学校ではキャリア教育の柱となり得ない。

さて、高校はどうか。平成3年の答申では偏差値打破が言われているが、結局のところ、学校内で行われただけであり、業者による偏差値で高校が選択されている場合が多い。教員の自信のなさ・失敗を怖れる心、保護者のクレーム、生徒の弱さなどで安全策をとっての進学が多く。普通科だけでなく専門学科や総合学科でも偏差値入学も多いのが現状である。結局、発達段階の中で、中学校でのキャリア意識を本人も含め周りが未発達としまっている現状がある。つまり、大学はキャリア教育の術を持たず、小中学校ではキャリア未発達の中で、柱となるのは高校なのである。

高校から高等教育機関への進学率は80%であると述べたが、その中には、大学・高専・短大・専門学校等がある。それに加えて就職。ここで初めて、生徒の選択というものが行われることになる。将来を否が応でも見ないといけないのである。大きな転換点である。そこでの、高校1年での「産業社会と人間」はこれからの教育の中で必須のものであると考える。高校までは、「みんなでわたろう」であるが、高校卒業後は多様となる。そこで、その多様性を教員も生徒も認識しないといけない。それがこの時間である。幸いに、高校教員と生徒は近い関係である。その距離感は進路を話し合うのにいい距離感である。大学ではそれはないし、研究主体であるのでそれは求められない。一部の大学ではキャリアセンターなるものを設けているが敷居が高いのと、学生の実態を知らなさすぎて、適切な指導となっているとは言い難い。それを考えると、高校での教員と生徒の距離感は、「産業社会と人間」だけでなく、HR活動や進路指導の中で、総体として「キャリア教育」となり、ここでのキャリア教育が、一人の「児童・生徒・学生」のキャリア教育の原点であり、柱

となると考える。よく、進学校は不要であるとか言われたりするが、大学で不適應を起こすのが普通科卒の学生である。行ける大学を目指して合格、結局のところ、一生偏差値に振り回され、主体的な選択がなされてないからである。

さらに、「産業社会と人間」を含め総合学科の不要論者は、教科専門主義者であろう。生徒を見ていない。生徒の全人格を見ての進路指導が必要であるにもかかわらず、自分の教科の中に閉じこもってれば自分は安泰であるからである。少子化時代に突入していくわけであるから、いい意味で生徒主体（厳しさも含む）の指導に切り替えて行かなければならない。

一方、「総合学科」や「産業社会と人間」を混乱させたのは、「総合的な学習の時間」の導入とその時間数である。小学校は問題ないが、中学・高校は教科別であり、ここで「総合」の意図が重荷になったのである。筆者は「総合」は十分に理解し、促進論者であったが、それはごく少数で、「教科書もなく、何をやらいいかわからない」とほとんどの教員が嘆く結果となり、同じ「総合」という言葉でくくられた「総合学科」は停滞時期を迎えることとなった。

筆者は、総合学科の改組に関わり、「産業社会と人間」の科目開発に関わった人間である。その人間が大学へ移籍して、大学のキャリア教育の惨状、就活予備校化する大学、就活塾的などころが暗闘する状況を見て、あらためて「幼児期から高等教育まで、組織的・体系的にキャリア教育・職業教育を行う必要性がある」と答申で延べられたことは大きな意義があると考え。しかし、これを、どう文部科学省が理解し、教育委員会がどう捉え、学校現場がどう動くか、これがポイントである。私は、失われた 20 年と解釈しているが、これにさらに失われた 10 年・20 年と積み重ねられていくのか、それとも、現状を改革し、20 年までは取り戻せなくても 10 年は取り戻せるか、日本の教育全般にわたっても大きな転換点であり、本報告を生かして欲しいものである。年次移行なんて言っていたら、それだけで失われる 10 年はすぐに経つ。即、実行しないと、教育だけでなく、日本全体の活力が低下し、日本崩壊・沈没が見えてくる。現場は、常に動いている。会議している時間も、これを執筆している時間も。それを取り戻すにはどれだけの時間がかかるだろうか。

（5）本項のまとめにかえて～若者に未来を与える提言～

映画「三丁目の夕日」シリーズでは、高度経済成長時の懐かしき昭和の群像が描かれている。現在上映中の「'64」ではポスターに、「どんなに時代が変わっても、夢があるから、前を向ける。」と記されている。

われわれ大人は、教師は、生徒に夢を与えているだろうか。大人も教師も夢を与えようと必死である。我が子が、そして我が教え子はかわいいもので、夢を描かせようとする。しかし、現実の社会はその夢を描くことができない。子どもながらに、「夢は正社員」の現実は極めて深刻な状況である。「三丁目の夕日」の夢は、そのようなものではない。高度経済成長期とはいえ、それは後から名付けられたものであり、当時の貧しさは今の比ではない。けれども、夢はあったのである。満たされてないからこそ、その欲求を満たすための欲求であるかもしれない。今は、満たされた世界だからこそ、夢がないともいえるが、ここでの「正社員」は、この生活をせめて維持したいという意識の現れであろう。

毎日の日々のマスコミ報道は、不景気、就職難、少子高齢化、ごくごく最近の「国家公務員 09 年度比 4 割減」、いや「国家公務員 09 年度比 7 割減」は生徒たちへの心理的不安

要素をあおるものである。私利私欲に走り、事業の海外移転をさっさとする企業、人件費削減のためにパート・アルバイト募集に躍起になる企業、同様な目的で、派遣社員を雇う企業、派遣企業に勤める社員・友人同士の話の中でも、

「仕事何しとるん？」－「〇〇の正社員」「〇〇の派遣」「〇〇のパート、アルバイト」

というような、正社か非正規かの会話が当たり前になってきている。昔は、こんなことはなかった。企業の安易な人件費削減のための海外移転、採用減は若年齢者の雇用を少なくする。さらに、国家公務員の採用減は地方公務員の採用減にも波及する。まさに、若者の雇用環境は負のスパイラルを生む。一方の定年延長も、若者の雇用環境を悪化させる。単なる定年延長であれば、その給与分で若者の雇用をどれだけできるか。結局、様々な改革が、若者の夢を奪う結果となっている。

今の若者の有り様を、「ゆとり教育」の「ゆとり世代」だからダメだといい、若者の自己肯定感を損なわせる。「ゆとり教育」を上手く運用できなかった教師にも問題があるが、高卒だけでなく、大学・専門学校卒も含めた労働需要の縮小にある。「ゆとり」をうまく使って、本科目のような様々な体験をしっかりとさせれば、雇用のミスマッチも解消できる。結局、「ゆとり」の良さを「ゆとり」のない教師（これは、様々な要因がある）がうまく指導できず、結局、元に戻ろうとしている。教師の無能さをさらけだして、やりやすいマニュアルのある教科教育に戻ろうとしている。ただ、筆者らも、それを大きな声で叫び広げることができなかったことは反省すべきであるが、矢継ぎ早に、「総合」の指導ができない教員に「総合的な学習の時間」を導入し、さらに、「中高一貫校」を導入するに至って、総合学科さえも、総合的な学習の時間でさえも十分に理解できない教育現場は、混乱の渦の中に入り、「総合学科」も「総合的な学習の時間」も影が薄くなったのは、現場にいた筆者の本音である。また、「ゆとり教育」を推進しながら、批判を受ければすぐに撤回するような猫の目行政を行う担当官庁も問題であり、腰の据わった行政が行われなければ、一個人の学齢期間である16～20年間に教育方針が転換されては、教師も子どもも、親もたまったものではない。連続性もあるので、改革は容易でないことを認識していただきたい。

さらに、前述の国家公務員の削減に始まる労働需要の縮小の負のスパイラルは、これは関係官庁の問題でもあり、国家・政治の問題でもある。政治家を含めて、誰も責任をとらない「若者の育て方」、次代を担う「若者」を置き去りにした厚生労働省を始めとするすべての官庁、その責任も大きい。結局、学卒後は、就労するのであるから、その環境を整えない限り、そこに「夢」がない限り、前に向かっては歩めない。他人事ではない、国の機関である内閣府・総務省・法務省・外務省・財務省・文部科学省・国土交通省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・防衛省・自衛隊・警察庁・総務省消防庁、全てが現在の児童・生徒・学生に向き合って話し合い、その主体として、文部科学省の在り方が問われるものと考えられる。

「政治主導」ということばがもてはやされているが、国の教育は「文部科学省」主体であり、政治が介入すべきでない。ただし、そこには、「若者の教育に責任を持つ」という御旗のもとに、「責任を持つ者」がいることが必要である。

筆者らが現場にいた時、保護者から「自分の子どもに何かがあった時、誰が責任をとるのか？」と問われた時に、筆者は、「全て、私が責任をとります」と言った。また、筆者は専門学科から総合学科への改組に際して反対の教員から、「失敗したら誰が責任をとるんだ」と詰め寄られたが、「全て責任をとる」と断言した。それは、自らの責任の所在を明ら

かにすることで逃げられないように背負うことであるとともに、「成功する」という自信と見通しがあったからである。

若者が、「どんなに時代が変わっても、夢があるから、前を向ける。」そういう時代にすべく、それを牽引する文部科学省－教育委員会－教師が一体となって頑張りたいものである。なお、昨年10月に東洋経済新報社から発行された「就活は3年生からでは遅すぎる！－内定を勝ち取るための、大学1～2年生の過ごし方」(田宮寛之著)があるが、筆者らの経験から言うと、「それでも遅すぎる、就活は高校1年生の「産業社会と人間で」と本報告書の名前を変えたいくらいである。

最後に、本節のまとめとして、小学校から大学までを通したキャリア教育の在り方の提言を一覧としてまとめる。

表3-4-1 キャリア教育を中心とした学習の在り方(提言)

| 校種 | 学年 | キャリア教育を中心とした学習の展開(提言) | 支援組織 | |
|-----|------|---|---|------------------|
| 小学校 | 1 | 生活(学校の周りの地図を作ろう、栽培・飼育体験) | 学校周辺、内閣府 | |
| | 2 | 生活(学校の周りの仕事を知ろう)、栽培・飼育体験 | 学校周辺、内閣府 | |
| | 3 | 総合(校区内の地図を作る) | 地元自治会等 | |
| | 4 | 総合(校区内の仕事を知ろう) | 地元自治会等 | |
| | 5 | 社会・総合(職場実習2～3日…産業について実体験を通して考える) ※子ども農山漁村交流プロジェクトの実施 | 地元教育委員会 農水・総務・文科省 | |
| | 6 | 特活・道徳(自分の学びを考える…第一次選択期) | 地元教育委員会 | |
| 中学校 | 1 | 特活・総合(中1ギャップを考える…学びの転換) | 地元教育委員会 | |
| | 2 | 特活・総合(職場実習…3～5日) | 地元教育委員会 | |
| | 3 | 特活・総合(自分の将来を考える…第二次選択期) ※就職選択者(年度初め)…Jr社会人基礎力チェック | 地元教育委員会 厚労・経産省 | |
| 高校 | 高専 | 1① | 「産業社会と人間」の導入(内、インターシップ5～7日) ※学びの折り返し点…振り返り、先を見通す | 県教育委員会 厚労・経産省 |
| | | 2② | 特活・総合(ジョブシャドウ、Jr社会人基礎力・Jr学生基礎力チェック) | 文科・厚労・経産省 |
| | | 3③ | 特活・総合(自分の将来を考える…第三次選択期) | 文科・厚労・経産省 |
| 大学 | 専門短大 | 1④ | キャリアデザイン(特設)、学士基礎力チェック、長期インターシップ | 文科・厚労・経産省 |
| | | 2⑤ | キャリアデザイン(特設)、長期インターシップ、ジョブシャドウ | 文科・厚労・経産省 |
| | | 3 | 前期:社会人基礎力チェック 後期:就活開始(自分の将来を考える…第四次選択期) | 文科・厚労・経産省 |
| | | 4 | 前期:就活、社会人基礎力チェック 後期:学び(16年間)のまとめ、就職前教育 | 文科・厚労・経産省 |

(小田 清隆)

「産業社会と人間」に関する調査

お願い この調査は、文部科学省初等中等教育局の実施する「高等学校教育改革の推進に関する調査研究事業」における委託研究「総合学科の在り方に関する調査研究」のための基礎資料として使わせていただくことを目的としています。

ご回答いただきました調査内容は統計的に処理されますので、回答者ご自身にご迷惑を及ぼすようなことは決してございません。ありのままにご回答くださいますようお願い申し上げます。

高等学校総合学科検証調査研究会

研究代表者：東京女子体育大学教授（前筑波大学附属坂戸高等学校長） 服部 次郎

*本調査は、御校の「産業社会と人間」を中心になって担当されている先生にご回答いただけますようお願い申し上げます。

1. 「産業社会と人間」の下記分野について、御校の代表的な学習活動をご紹介ください。

(例) 職場実習、卒業生へのインタビュー など

ア 自己理解

| |
|--|
| |
|--|

イ 社会理解

| |
|--|
| |
|--|

ウ 職業理解

| |
|--|
| |
|--|

エ 履修計画

| |
|--|
| |
|--|

2. 御校では「産業社会と人間」に関する独自のテキスト（ノート）を作成していますか？

はい ・ いいえ

※「はい」と答えた方へ 差し支えなければノートの目次のコピーを一部いただければ幸いです。

3. 「産業社会と人間」を学んだ後、2・3年次における継続的なキャリア教育を展開している場合は、下記にご記入下さい。

(例・2年次で「総合的な学習の時間」において上級学校見学を実施している 等)

| |
|--|
| |
|--|

4. 「産業社会と人間」の授業計画の際、中学校でのキャリア教育の学習内容をふまえて計画を立てていますか？

はい ・ いいえ

「はい」と答えた方へ どのような配慮をしているか、ご記入下さい。

5. 中高連携（小学校・大学でも可）のキャリア教育を実践していますか？または今後する予定がありますか？

はい ・ いいえ

「はい」と答えた方へ どのような連携を実践しているか、ご記入下さい。

ご協力ありがとうございました。大変お手数ですが、ご返信の際、御校の「産業社会と人間」年間計画表と、独自のテキスト（ノート）を作成されている場合はその目次（コンテンツ）をコピー（複写）して同封いただけましたら幸いです。

「産業社会と人間」年間計画表については、文部科学省のHPでモデルプランを公開する予定があります。もしも、御校の年間計画表の公開を求められたときに、公開の許諾がいただけるかどうかの予備調査を行っています。下記にお答えください。

○「産業社会と人間」年間計画表を文部科学省のHPで公開しても

よい よくない （どちらかに○を付けてください）

学校名 _____

校長名 _____

記載責任者 職・氏名 _____